

---

# 災害絵図研究試論

18世紀後半から19世紀の日本における災害事例を中心に

---

An Essay on the Disaster-Pictures from the Late 18th Century to the 19th in Japan

北原糸子

[要旨] ここでは、災害資料全般の見通しを付ける第一歩として、民間の情報活動が活発化する近世中後期以降災害絵図を素材に、史料の分類を試みた。分類は、制作担当者、成果物の閲覧者または利用者、制作目的の三項を基準に行い、A 領主が公的な目的で作らせたもの、B 領主の命令に応じて村役人などが被害の報告を行ったもの、C 個人的必要や興味で記録・絵図にあらわしたもの、D 世の中の不特定多数の人々に向けて売り出すために作られたものの概ね四種類に分類した。

この分類にしたがって、1) 天明3年浅間山噴火(1783)、2) 寛政4年雲仙普賢岳噴火(1792)、3) 弘化4年善光寺地震(1847)、4) 安政大地震(1854, 1855)の5つの大災害の実例を検討した。

上記の例に即して、同一の災害に関するA、B、C、Dそれぞれのカテゴリーに属する絵図類を比較検討することを通して、何のために、何に向かって発せられるかが、情報内容をいかに大きく規定するものかを実態的に認識することができた。特に本論では、従来の災害研究では正確な情報ではないとして評価が低いDに分類されるかわら版類を、近世情報構造のなかに位置づけ、その位相を把握することができたことは意義がある。

## はじめに

地震や噴火の自然現象を社会がどう受けとめたかを探る上で、日本歴史上、記録の大衆化が可能になった近世期は、公私両面にわたる豊富な材料をわたしたちに提供してくれる。また、これらの災害は一定の周期性を持つため、現在においてもそうした記録の有用性が防災を目的とする災害科学の面から高く評価され、すでに理学的、工学的な分析・考察の素材として利用され、その成果も提出されている。

しかし、そこで高く価値付けされているものは、災害による地変の正確な記述、正確な描写がなされたもののみである。が、現在残されている文字や絵で現わされた災害資料群はこうしたものに限らない。そして必ずしも地変の発生を正しく伝えるもののみが当時の社会において有意味であったわけでもない。ここでは、ひとまず、近世における災害情報を災害絵図に限って、歴史学の立場から分析を試みておく必要があると考えた。

さて、以下に示す災害絵図のカテゴライズは、あくまでも暫定的なものであって、災害資料群分類の第一歩にすぎない。

では、いまなぜ絵図に限定するのか。ここで、災害情報全般を扱う余裕がないこと、災害資料全般の分類は、その厩大きさからして当面困難であること、言語表現ではカバーできない領域で、災害絵図が多く残されていること、災害情報の伝播を追う点では絵図は比較的簡単に差異を識別できる

ことなどから、近世の災害情報の特質を考えるうえで有利な素材であると考えた。

ここで、災害絵図と称するものは、災害状況を地図上に、または絵画的に表現したものの双方を含む。また、文字の注記を伴う場合が多いが、総体として絵を主体にしたものを災害絵図とひと括りにした。また気象災害としての洪水、火事などの災害絵図も多く残されているが、ここでは当面、除外した。理由は、上記の地震・噴火・津波などとは生成因・災害特性も異なり、より常襲的、社会的要因の関与が高いという点で、情報が地域内に留まるなど、災害に対する社会的な対応も異なるからである。

## 1. 近世における災害絵図の分類

災害絵図を、制作者、対象、目的の違いによって、次のような4つに分類した。

- A. 諸藩が御用絵師などを使って、災害の地変を描かせ、災害の実態をとらえようとしたもの
- B. 村役人などの半公人が自村の被害を報告する、あるいは自己の体験を後世に伝えるために記録化あるいは描写したもの
- C. 個人の見聞記類
- D. 災害を絵図やものがたりに仕立てたり、かわら版などの木版印刷にして、書物問屋、絵双紙屋、あるいは街角で読み売るなど、大量生産、大量消費用に作られるもの

以上のことを簡略化した表に示しておく(表1)。

A, B, Cは、すでに近世初期から存在したと考えられるが、Dは情報が売買される条件が整う近世中後期に一般化する。災害の発生の有無に規定されるとはいえ、特に、C, Dは近世後期にその量が急増し、内容的にも多様なものになる。

上記の四分類は、また、情報の公開度を示す指標とも重なる。近世の情報問題の特徴のひとつに、為政者に不都合な情報は秘匿されるか、場合によっては、情報の発信者が処分されることも少なくなかった。そのため、民間ではリーク情報が積極的に求められ、活用されたという点が挙げられる。つまり、A, BあるいはCに属する特殊な個人(たとえば、藩の役人など)のレベルの情報がC, Dでミックスし、新たな価値を生むものとして広く民間に流布するという構図を描くことができる。概して、災害情報は、安否情報の点からも民間において需要が高く、民情安定のためにも禁止の対象とはしにくかったから、総じて幕府による情報規制が緩かったと考えられている。近世中期、かわら版が災害情報から発生し、現在残されているかわら版類の資料のうちでも、災害に関わるものがもっとも多い点はこのことを証明している。

この点を以下で、小野コレクションの例で示しておく。

表2は、東京大学社会情報研究所の小野秀雄<sup>(1)</sup>コレクションのうち災害かわら版類の災害別年代を軸に分類したものである。火事や風水害などの常襲性の高いものは、すべての事例にわたってかわら版が出版されるわけではないが、残されているかわら版にも、これらの災害の常襲性が反映されている。これに対して噴火・地震津波のかわら版は、1780年代に4点、1840年代に9点、1850年代に100点と一定の災害事例に集中していることがわかる。1780年代の4点はすべて天明3年(1783)浅間山の噴火に関するものであり、地震津波の項での1840年代はすべて弘化4年(1847)善光寺地震の事例である。1850年代のものは、嘉永6年(1853)2月2日の相模地方を中心とする地震5

表1 災害絵図分類（日本近世期）

分類	制作者	観覧対象者	制作目的
A	幕府・藩に所属する専門的職業絵師	幕閣、藩主など為政者	災害実情把握
B	村役人など	代官・藩庁役人	被災報告
C	個人	知人・親戚自家の後裔	伝聞・体験の記録化と継承
D	作家・出版業者	一般社会の購買層	情報の伝播、利益の獲得

表2 小野秀雄かわら版類コレクション分類

年代	噴火	火事	風水害	地震津波	小計
1780	4				4
1790	1				1
1810		1			1
1820		4			4
1830		15	3		18
1840		13	2	9	24
1850		38	8	100	146
1860		15	2		17
1870		1			1
1880	2		1		3
1890		1		1	2
不明		37		3	40
他		1		1	2
合計	7	126	16	114	263

註 東京大学社会情報研究所小野コレクションのかわら版類を対象とする。(ヴィジュアルコミュニケーション研究会〈代表 吉見俊哉〉提供)

点、嘉永7年（1854）6月14日の伊賀上野地震10点、他は安政元年（1853）11月4日、5日の安政東南海地震が49点、同年10月2日の江戸地震が45点、他1点は同年7月23日の小規模な地震1点である。要するに、巨大な、しかも特定の災害にかかわら版情報が集中していることがはっきりする。

これらのかわら版は、まず、このコレクションの当事者である小野秀雄によって分析され、新聞学前史としての位置付けがなされた。<sup>(2)</sup> 続いて社会的コミュニケーションの関心から、こうしたかわら版類を生み出す社会関係の変化に言及されるようになった。<sup>(3)</sup> それ以後は、かわら版というものの自体の考証を中心とした著作がコレクターを中心に出版された。<sup>(4)</sup>

なお、先の表2には、いわゆる道化物と呼ばれる安政江戸地震時に大量に出版された地震鯨絵の類は対象に入れていない。被害を中心に論じた報道性の強いものだけに限った数値である。これに、そうした類のものを加えると、1850年代の災害かわら版は倍近く増加し、圧倒的な数値を示す。

これらの点を踏まえ、以下の突発な自然災害に際して出された災害絵図の分類を試みることにしたい。

以下で中心的に扱う災害事例は、

1. 天明3年浅間山噴火 (1783)
2. 寛政4年島原雲仙普賢岳噴火 (1792)
3. 弘化4年善光寺地震 (1847)
4. 安政東南海地震・安政江戸地震 (1854・1855)

の四例である。本稿の関心が災害情報の伝播を主要なテーマとするため、上記の分類のカテゴリーDが出現し始める時期以降に対象を限定した。この点の社会史的意味については既に各所で論じたのでここではくり返さない。<sup>(5)</sup>

最後に付け加えておきたい点は、研究の現状に対するひとつの反省である。先に述べたように、自然科学分野では専ら災害絵図に精度が求められ、人文系の分野では鯉絵のような素材にだけ関心が集中し、相互の社会的連関に配慮がなされていないという点である。<sup>(6)</sup>

そのため、研究分野の違いによって分断されている災害絵図群に対する認識に、社会的文脈を付ける方法として、まず、それが生み出された社会状況のなかにおき、それを災害の情報化過程という視点から再読してみることはないかということである。

以下で扱う、A、B、C、Dのカテゴリーで論ずる災害絵図の一覧(表3)を示しておく。

表3にみるように、それぞれのカテゴリーに属する絵が必ずしもバランスよく配されているわけではない。ひとつの災害で、A～Dのカテゴリーに属するものをすべて豊富に持つ場合もあるが、A～Dのカテゴリーのうち、Aを欠く事例やBを欠く事例もある。それは、今のところ調査が行き届かず、発見にいたらないか、あるいは長い期間を経る間に散失してしまったという場合が殆どであろうと考えられる。

したがって、以下に挙げる一つの災害事例からA～Dのすべてのカテゴリーを検出できなくとも、近世の社会構成に照らして蓋然性を持つカテゴリー化であれば、一般的有効性を持つのではないかと考える。

## 2. 天明3年(1783)浅間山噴火

浅間山噴火でAのカテゴリーに属するもの、つまり、藩が直接に災害について体系的な把握を試みたものあるいはそれを踏まえ、幕府へ復旧資金の借入れ等の必要上提出した絵図などの控えをいまのところ見出ししていない。

浅間山噴火については、1995年群馬県立歴史博物館において「天明浅間山焼け」と題する展示が行われ、山焼けに関する数多くの絵図の所在が明らかにされた。本稿の浅間山噴火に関する災害絵図は、大部分そこで所蔵先が明らかになったものを同館のご協力を得て分析対象とした。<sup>(7)</sup>

浅間山噴火の絵図は、火砕流に襲われた浅間山北麓と、降灰と軽石の被害が中心であった南麓では描かれる図像が全く異なるという。<sup>(8)</sup>参考までに、浅間山天明噴火について火山学的分析による火砕流と降灰の分布図を掲げておく(図1)。なお、本稿で論及する絵図の描かれた場所を推定した地点を1887年測量中に絵図分類番号を以て示しておく(図2)。

表3 災害絵図一覧表

カテゴリー	分類番号 ( )内法量, 単位cm
A	島原A-1「寛政四年大震図」(234×136)
	島原A-2「島原大變大地図」(152.5×221.5)
	島原A-3「大變後島原図」(156×161)
	善光寺A-1「信州地震大絵図」(190×420)
	善光寺A-2 青木雪卿「封内御巡視之絵図」(36.5×60.5)
	(伊折村大田組震災山崩跡之図)
B	浅間B-1「浅間焼け吾妻川沿岩井村畑泥押し図」(40×57)
	浅間B-2「矢倉村天明三年浅間山噴火荒地絵図」(45×57)
C	浅間C-1 (1)「浅間山全鉢之図」(29×43)
	浅間C-1 (2)「浅間山大焼之図」(29×43)
	浅間C-1 (3)「浅間山大焼之図」(29×43)
	浅間C-1 (4)「浅間山夜分大焼ノ図」(29×43)
	浅間C-1 (5)「信州浅間山全鉢之図」(29×43)
	浅間C-2「信濃国佐久郡浅間嶽之図」(65×95)
	浅間C-3「信州佐久郡浅間ヶ嶽大變略図」(38.5×110)
	浅間C-4「信濃国浅間嶽焼跡之図」(68.7×41)
	浅間C-5 (1)「天明三浅間噴火実況」(32.5×44)
	浅間C-5 (2)「天明三浅間噴火実況」(32.5×44)
	浅間C-6「浅間山吹出之絵図」(29×43)
	浅間C-7「浅間山大焼之図」(33×73)
	浅間C-8「浅間山焼出上州火石流満水絵図」(100×69)
	浅間C-9「浅間焼け吾妻川利根川泥押絵図」(156×84)
	浅間C-10「吾妻川筋被害絵図」
	浅間C-11「天明三年浅間山焼出図」(29×155)
	浅間C-12 (1)「浅間嶽焼図之掛絵図」(35.3×47.7)
	浅間C-12 (2)「浅間嶽焼図之掛絵図」(35.3×47.7)
	島原C-1「寛政四子年肥前国嶋原山々燃崩城下町々村々破損ノ図」(38.7×56)
	島原C-2「島原国」(「後見笑」挿図)(25×32.3)
D	浅間D-1「浅間山噴火かわら版」その1(仮)(33×25)
	浅間D-2「浅間山噴火かわら版」その2(仮)(33×25)
	島原D-1「島原大變」(仮)(23.5×33)
	善光寺D-1「弘化丁未春三月廿四日信州大地震山頽川塞湛水之図」(90×88.5)
	善光寺D-2「弘化丁未夏四月十三日信州犀川崩激六郡漂蕩之図」(90×66.5)
	善光寺D-3「信州二度目大地震」(26×36)
	善光寺D-4「信州善光寺川中嶋松代稻荷山その外町々村々地震出火の次第」(23×35)
安政D-1「諸国大地震」(33.7×94.6)	
安政D-2「安政二卯年十月二日大地震附類焼場所」(50×73.3)	
安政D-3「ち志ん乃辨」(50.3×37)	

(1)カテゴリーB

Bのカテゴリーに属する事例を二例挙げる。いずれも、村の被害報告で、代官所に提出されたと推定される。

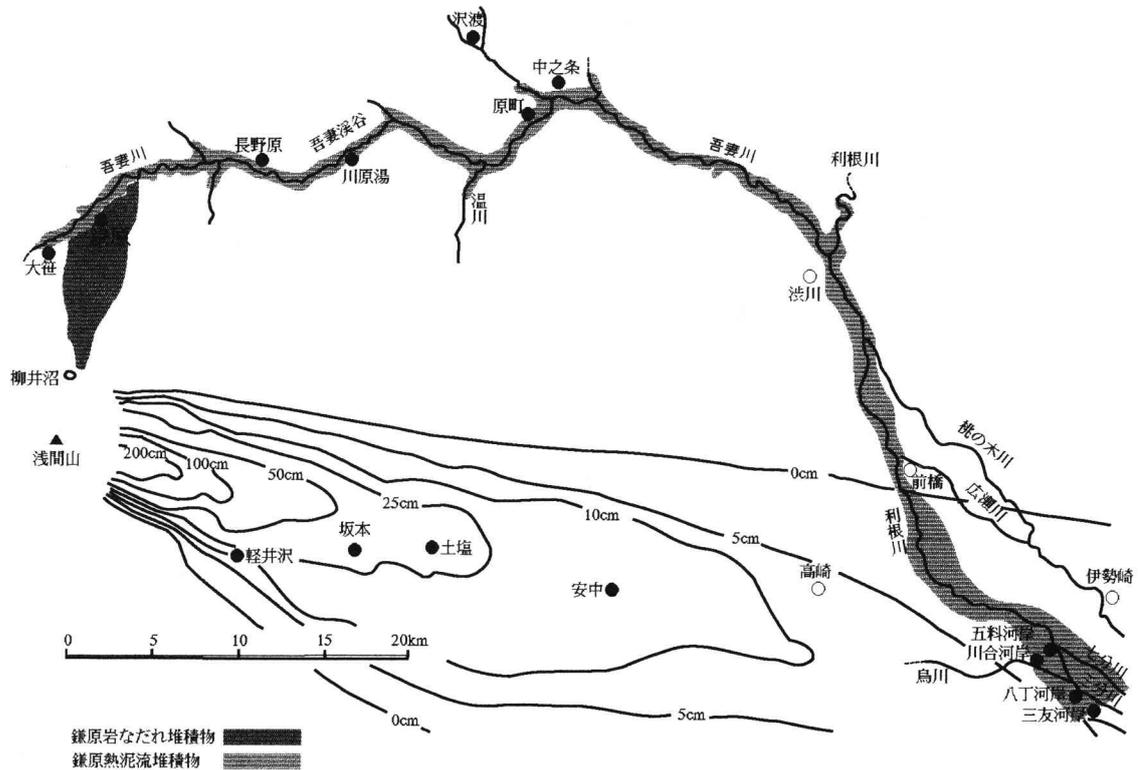


図1 天明3年浅間山噴火(1783)における鎌原岩なだれ・熱泥流による被害範囲と天明軽石の等厚線(田村・早川, 1995)「史料解説による浅間山天明三年(1783年)噴火推移の再構築」『地学雑誌』104-6(1995)図3による作図

Fig. 1 The disaster areas of the Eruption of Mt. Asama 1783: the distribution of mudflow, the thickness of downfall of ash, and lava flow

○浅間B-1(図3)(吾妻町伊能直樹氏蔵) 岩井村は吾妻川を挟んで、中之条の対岸にある。村高737石のうち、44石が泥流によって被害を受けた。川沿いの低い地帯に被害が集中したことが絵図に示されている。

○浅間B-2(図4)(吾妻町渡忠男丸氏蔵) 吾妻川北岸の矢倉村の被害絵図である。村高775石のうち100石が泥流入りとなった。村人11名が流死した。

いずれも、自村の領域に限定された被害域の報告であり、年貢収納量に直接関わる事柄であった。これは目的が限定されているから、これによって災害の全体像を把握することは困難である。

## (2)カテゴリーC

Bカテゴリー、つまり村役人に属する者であっても、個人の立場で記録・絵図などを残した事例については、Cカテゴリーとした。BとCはあくまで指標であるから、Bの立場で得られた情報を個人として記録化する場合はCカテゴリーとした。Cに属するものが多いことは、表3からすでに明らかである。図1に示したように、南麓・北麓に分けて、みて行くことにしたい。

実際に見聞したものを描くということになれば、同一の災害でも被害の受け方によって災害像が

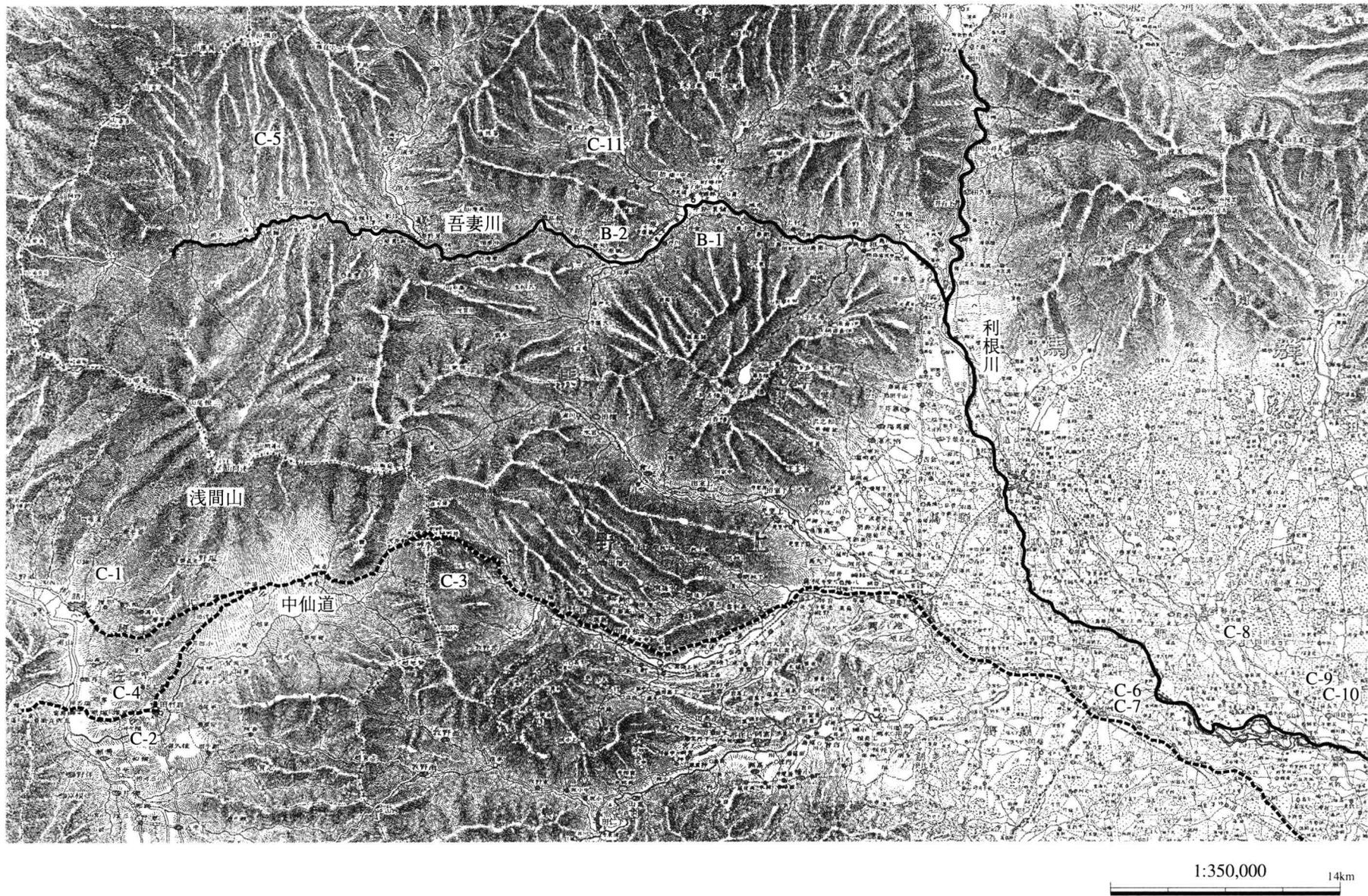


図2 天明3年浅間山噴火(1783)災害絵図関係地点  
 地図上に示した記号番号は、表3「災害絵図一覧表」の浅間の項参照  
 Fig. 2 The supposed spots on the map where the disaster-pictures were drawn around Mt.Asama

異なる、あるいはこの災害に対する関心の持ち方が違ってくるのは当然である。まず、南側からみていこう。

**C (南山麓), 浅間C-1 (図5～9) (小諸市美斎津洋夫氏蔵)**

天明の浅間山噴火では必ずといってよいほど例に挙げられる噴火のクライマックスの絵図が含まれる8枚組の絵図である。約3ヶ月にわたる噴火現象を平時から～噴火の終焉、それに約20年後の享和3年の小噴火までも描いている。この絵図は後年収集されたもののひとつだという。8枚組のうち、噴火の現象の画期となる例を掲げ絵図に付け加えられた説明文を引用しておく。

○浅間C-1の(1) (図5) 「天明癸卯年迄浅間山全躰之図 平日如此烟不絶, 四月登山スル, 山半腹へ上レハ, 山ノ下ニテドロ々々ト雷之如クナルナリ」

と、鳴動の前兆があったことを記録している。なお、中仙道、脇往還を描き、どの範囲における情報かを予め示している点は、当初からこの噴火現象を自己の覚え書きに留めず、他者の眼を意識した表現方法だといえよう。

○浅間C-1の(2) (図6) 「天明三癸卯年五月廿六日始而焼出之体 夫ヨリ六月晦日, 七月一日, 同二日, 同六日, 七日, 八日, 大焼, 昼夜之図別ニアリ, 此大焼ノ時ノ日本国中ニ炭フリト也, 併信州ノ内ニハ格別破損モナキヨシ, 唯上野下野ナト破損所移シク, 人屋亡失ト子川ナトヘ流れ来ル, 死骸等数ヲシラス, 此川水熱湯トナリテ河辺ノ人又多ク死亡スル, スヘテ三四十里ヲ隔テ山ノ見ヘサル等トノ所ヘニテ, 焼石等飛チリテ不慮ニ死亡スル人アリト云々」

軽井沢宿の属する信州は被害は格別ないが、上野、下野が被害が激しく、利根川の川水が熱湯になり、人が多く死んだこと、山が見えない所にまで焼石が飛び人が死んだことなど噴火の爆発力の凄まじい様子を簡略に説明する。

○浅間C-1の(3) (図7) 「烟ノ内ニ雷光ノ如ク光リヲ発シ, 此烟三四十里四方ニ見エワタル, 震動不絶 (1-2)の文と重複に付き中略), 六月廿九日・七月朔日・同二日此三日昼夜大焼昼之図, 七月六日・同月七日・同月八日三日共至テ大焼震動甚シク昼モ雷光移<sup>(駭カ)</sup>, 前懸山ニ火玉多シ」  
火山雷が激しく発生している状況が描かれている。次の夜景と併せ、昼夜の様子を伝える。

○浅間C-1の(4) (図8) 「三ナリ程ハ火玉八十斤程ノ飛散, 上州之内二百ヶ村程人屋焼失死亡多シ, 焼灰フル事雪ノ如ク, 五六寸ツツモリタルトナリ, 風上ノ方ハ一二寸程ツツモル, 其外百里四方ニ炭フス<sup>(ママ)(ママ)</sup>, 七月朔日, 同月六日, 同月七日, 夜分大焼之図」

3回大爆発があり、火山弾八十斤(42kg)が飛び、上州のうち200ヶ村で人家焼失、降灰が雪の如く激しく、100里(約400km)四方に及んだと記す。

○浅間C-1の(5) (図9) 「信州浅間山全躰之図 天明三年ノ大焼以後峯一ツ吹出シタル図如此」

C-1の(1)～(4)には描かれなかった山頂が描かれ、噴火によって生じた変化を観察・記録している。この後に、1枚付け加えられているのは享和3年(1803)10月7日の小噴火の図である。中間の2枚は省略したが、全体として、現象と被害の簡略・適確な説明が施されている点は首肯できよう。この災害絵図とほぼ同じ視角から描かれ、説明文も同一のもの(部分的)がある。どちらが元の図かは決せられないが、同時期の写図を後年に写したものであることを注記した図が伝わることから、当時村役人やその他の人々の間で写し回されたと考えられる。<sup>(9)</sup>

○浅間C-2 (図10) (望月町大沢酒造蔵)

この図は、観察地点が貼付によって、明らかにされている。

「信乃国佐久郡浅間嶽之国 天明三癸卯歳七月六日ヨリ昼夜八日己刻迄震動雷電大焼見取絵図、  
碓氷峠方煙ノ中ニテ見分ケ兼、別紙聞書アリ、是者岩邑田・塩間田之間ニテ見渡之図也」

7月6日～8日の噴火のクライマックスの見取図で、碓氷峠は煙の中にあつて見えないとしている。絵図も浅間の背後北西を黒く塗り煙でみえない様子を伝えている。岩村田・塩名田の間からの描写としており、江戸中期以来佐久郡望月で酒造業を営む大沢家に伝えられてきた絵図であることから、伝聞に基づく要素より、実見に基づいたものとして考えてよいであろう。

#### ○浅間C-3 (図11) (東京三井文庫蔵)

三井文庫目録に納められている資料のうち、現在、浅間山噴火関係絵図類は、彩色された絵図四点、噴火状況を伝える上州からの注進状などともにかかわら版など三点、藤岡辺に降下した軽石一包などがある。

彩色絵図四点は付属する文書を欠いていて、当時のものか否か判断の根拠が得られない。ただ、同文庫の文書群のうち、「しんまちみつ井け」の朱印のあるこの絵図は、新町三井家八代高辰氏(1844～1922)の蔵書印からこの時期に購入されたものである。後世に購入したものであり、噴火当時のものと断定できないと推定されている<sup>(10)</sup>。

噴火状況を伝える上州からの注進状などとも一括されている文書群のうちのかかわら版は当時の越後屋の資料と考えてよいとの事である。かわら版については、該当項目の所で扱うことにし、まず上記四点のうち、浅間山南麓の様子を描くものを検討しよう。

浅間山の噴火の状況を伝える絵図に、次の文章が書き入れられ、迫真の図であることが述べられている。

「或ハ土ノ降コトタ立ノ如ク往来不叶、軽井沢・沓掛・追分三宿過半焼失、死人其数ヲ知ス、漸ク鍋釜ヲカブリ逃去ル者纔カニシテ家財ヲ知ス捨テ一命ヲ助ノカル計ナリ、山林ノ鳥獸里へ出テ死コト沢ノ如、浅間山ノ絶頂<sup>(ママ)</sup>ヨリ燃上ル煙ハ鼠色ニシテ、其中ヨリ雷光ス、誠ニ震動雷電トハ此コト、始テ覚エ、惣<sup>(シテ)</sup>メ東北江煙靡キ南西ハ鳴動雷電計ニテ難ヲ逃ル、此図ハ塩ナダノ宿ヨリ遠見ノ図ト引合ス也、我等坂本宿ニテ七日ヨリ八日午ノ刻少シ晴ル間見テ逃去ル時迄ヲ書加へ、大略十分、一、一図ヲ記スル者也、誠ニ眼前正当ノ図ナリ

土石降コトタ立ノ如シ、積ル事所<sup>(コト)</sup>ニヨリ一丈或ハ五六尺ナリトソ」

「信州佐久郡浅間ヶ嶽大變略図」と題されるこの図は、軽井沢、追分、沓掛の三宿を中心とする被害の様子、人里へ出て来て死ぬ山中の動物が沢を成すほど沢山だということ、南麓は鳴動と降灰のみで被害の大きくないこと、クライマックスの7月8日の正午頃、空が少し明るくなった時坂本宿から逃げ出したが、それまでの見聞を、他の絵図を参照して描き、約10分の1の一図にしたと、実見したことを根拠にし、信頼できる情報であることを言外に含ませている。この図には、先に述べた「しんまちみつ井け」の朱印を欠いているが、当初からの越後屋の史料群として扱われたものには含まれず、新町三井家の絵図類と同分類に属している。したがって越後屋の文書として当時から存在していたものではない。しかしだからといって、この絵図(浅間C-3)の資料的価値が全く否定されるというものではない。但し、絵図に添えられた文章に対して、絵そのものが粗絵図ではないから、スケッチを基に後に仕上げられたということも考えられる。当時、こうした見聞絵図が

行き交ったということが推測される例として掲げておきたい。

○浅間C-4 (図12) (三井文庫蔵)

この図には、新町三井家九代高堅(1867-1945)氏が昭和5年に購入したものであるという。中仙道小諸辺から古宿までの間に降灰があり、軽井沢宿辺までは大石が降ったことを描くが、石峠、藤塚、柏木、八満、塩野などの浅間の南麓の村名の他、禅定院旧地、別当浅間山真楽寺、普賢寺、浅間明神など、一般的ランドマークとして登場して来なかった対象が特記されている。一般的被害を描くという点からみて、情報量が少ないから、上記の諸寺社に関係することを描く必要のある立場から作成されたものであろう。この絵図を掲げた理由は、前景のケンカ峯(剣ヶ峯)を前に倒すと前カケ山(前掛山)となり、更にそれを前に倒すと「宝暦四戌年ヨリ新釜」,「無間ヶ谷」,噴火口が「銚子口」と描かれる図が出てくる。絵画的工夫がなされている点では、噴火の地変を伝える伝統的技法のひとつとしてよいのかと考える。

C (北麓側)

○浅間C-5 (図13~14) (安中市美濃部昭夫氏蔵)

北麓の側の様子を描くものには、噴火の経過を中心とするもの一点の他はすべて吾妻川の洪水被害を中心に描くものであった。吾妻川の泥流被害が人々の関心の中心を成したことがわかる。

この図は、全体で7枚の絵によって噴火経過が描かれている。描かれた山の配置から、この経過が観察できる地点は凡そ浅間山の向いの北側、白根山の方から北へ向かっての眺望と推定される。現所蔵者が在住される安中市は浅間山の約36kmの所であるから、少なくとも現所蔵者の、天明期に存命であったご先祖自らが安中の地で実見した情景を描いたものではないと考える(参照地図)。しかし美濃部家は旧安中藩士、公務上収集される噴火情報の周辺で得られたものと推測すれば、安中という地点にこだわることで、これを伝聞の転写とする憶測にまで至らなくてもよいだろう。この絵図は、変化の過程を貼り重ねることで経過を表わすものである。当時「掛絵図」と称された。浅間C-1の場合も、現在は1枚ずつに分けられているが、貼付された痕跡がうかがえるから、同じく掛絵図であった可能性は高い。

この絵図については、7月6日から8日にかけての噴火の様子(浅間C-5の(1))と火砕流が山を下る様子を描く(浅間C-5の(2))を掲げておく。

この絵に興味深いというか、事実としてそうであったと思わせる描写は、煙が棚引く方向が、浅間南麓のC-1とは逆である。

この図は、噴火の経過に関心が集中しているが、次の一群(浅間C-6~)は、吾妻川に入った泥流の及ぶ範囲を描くものが中心をなす。

○浅間C-6 (図15) (群馬県立歴史博物館蔵)

図3によって明らかなように、浅間を挟んで南は中仙道の一つの軸として、宿毎に、降灰の有無、北側は鎌原村を壊滅させて吾妻川に入った火砕流及び泥川が洪水を起こし、流入する支川へ逆流して溢水し、被害を受けた村々を示す。このため、ここでは浅間C-10の一点を除き浅間の噴火の姿を左手におき、それを挟んで上下に吾妻川と中仙道を配する構図が多数を占める。描く範囲もほぼ利根川が支流を集めて一本となる五料河岸までとする例が多い。ここまでは、泥流の直接的被害が及んだからである。しかし、残されている絵の何点かは、南麓の場合と同じく元絵が存在して

伝写されたものであることが確認される。この浅間C-6には「江戸表御上覧ニ入候絵図之写」と注記されている。構図、表現法に一種の稚拙さを感じさせる。「上覧」に入れたもののそのままの写しかどうかは、元図がないから不明である。

元図は、私の分類ではカテゴリーAに入る筈のものである。注記には、以下のような簡単な説明が添えられている。

「天明三卯六月下旬より震動、砂石降七月六日七日浅間山吹出ス、坪井村より五料河岸迄凡弍十里余、万座山之上ニ而大沼四十ヶ所余吹出し在、村数凡百余ヶ村人家凡一万七千軒余、人馬損し数不数、西ハ三州尾州勢州迄、東ハ、奥州仙台迄震動ス」

この段階で、被害が起きて早い時期に江戸の代官所に報告したものか、吾妻川へ下った火砕流、泥流の発生源が浅間山とは考えず、万座山あたりと見当を付けたためか、絵図に書き入れた文字は「万座山より大沼吹出シ此筋之内村々竹木皆流」と吾妻川沿岸の村々の名をびっしり書き並べている。しかし、後になって発生源を万座山としたことの誤りを訂正すべく、「万座山之上ニ而大沼四十ヶ所吹出し」と書き消している。

○浅間C-7 (図16) (小諸市美斎津洋夫氏蔵)

浅間C-6を写したものと想定される。南麓の浅間C-1の一連の噴火絵図と同一人の手になると思われる。とすれば、自らが南麓での実見があるから、南麓部分については説明文を修正し、また万座山から火が吹いて、その溶岩が吾妻川沿岸村々を襲ったようには描いていない、事実と違うと感じた記載は写し取っていないのである。浅間C-6と同一の部分は省略し、異なる箇所を挙げると、

「信州浅間嶽大焼火石飛、宿二ヶ所焼失、…奥州仙台灰降水戸灰小石降、江戸 并砂灰降、左右百里余震動ス」

宿二ヶ所焼失として、軽井沢・杓掛宿の火災を描き、水戸に石が降り、江戸に砂が降ったことを付け加えている。浅間C-6では、吾妻川の両岸の洪水の被害を受けた村々として49ヶ村書き込まれた。ここでは、「村数合五十ヶ村人馬家も流失、其跡大沼となる」と付け加えているが、ここに実際写された両川岸村々も同じく49ヶ村である。これを写し取った人物は、縁者か知人を介して浅間北麓の被害の記録を得て、噴火による被害の全体像を捉えておく必要を感じていたのであろう。したがって想定される「江戸表御上覧ニ入候絵図」を元図とすれば、その写しである浅間C-6のそのまた伝写が浅間C-7ということになる。

○浅間C-8 (図17) (兵庫県尼崎市熊谷次郎氏蔵)

浅間C-6あるいは浅間C-7を90度ずらして、浅間山を北に置いた構図にすぎないということもいえるが、視点をどこに置いたかという点からは、重要な違いが生じる。この構図の場合は、吾妻川から利根川本流に至るまでの泥流の行方、洪水の範囲に関心が持たれている。そのためにランドマークとして赤城山も登場する。熊谷家は当時姫路藩士であり、旧領の前橋領での浅間噴火による被害が気掛かりのため情報収集した結果入手した災害絵図であるという。裏書には、

「天明三癸卯七月信州浅間山焼出、上野国吾妻郡江押出、吾妻川并杓川同所御番所押流、利根川江入而同国佐位郡<sup>(マ)</sup>那波郡迄満水如図之、言上書有別」

この絵図には、前橋城下が描かれ、旧同藩領域に利根川洪水がどれくらいに及んだのか概略を把握できるよう構図上の工夫がある。

○浅間C-9 (図18) (群馬県立歴史文書館蔵)

これは、安政3年(1856)の写しである。なぜ安政3年なのかは考えてみるべき問題ではあるが、関連資料のない現在、一般的に考えられるのは、安政元年(1854)、同2年(1855)の巨大津波、巨大地震、同年8月25日(1855)の暴風雨による利根川下流での洪水など災害がきっかけになっているということである。跋文には、噴火の開始、杳川・利根川の土石流と溺死者、降灰の範囲、通船困難の状況などが簡略に説明されている。「安政三年丙辰中秋日写 清香堂主人 印」とある。清香堂とは何者か今は不明である。この図の特徴は、吾妻川・利根川沿いの村々の被害について略記があること、川筋、河岸付村々の被害、洪水地域の様子について説明が付されていること、この図では下部の利根川下流の被害を受けなかった村も明記されていることである。恐らく原図が描かれた時、吾妻川の被害一般というよりも、この災害によって舟運がどのくらいの打撃を受け、何日で回復するのかに主要な関心のひとつがあったのだろう。

○浅間C-10 (図19) (群馬県境町飯島栄一郎氏蔵)

この図の視点は、利根川本流より西北側にある。この点はこれまでみてきた浅間北麓のものとは異なっている。それはまさに、所蔵者飯島家が本陣を勤めた境町辺からの視点だということになる。流家・流死人馬の数値を一覧にして、「村里之絵図細見」と題する点もこれまでにない整理された手法である。主要な関心が吾妻泥流にあること、しかも直接的関心は、前橋、伊勢崎に至る渡船の可能性の有無である。

○浅間C-11 (図20) (吾妻町渡忠男丸氏蔵)

本図は、浅間B-2の村絵図を蔵する家でもある。本図添付には以下の文が添えられ、この災害による衝撃が簡略に記されている。

「天明三癸卯五月中旬より信上の堺浅間山常々□□の大やけ、石□七月朔日より家なり震動する事□人驚あやし□、七月八日昼四ツ時□上よりわき出し、水火同流蒙る□よりセハきすゝ□丈余高く山のかたおし出したつ有様ハ身の□□言語道断、家居田畑流死人流死馬ハ先略し、川筋村々道筋の分あらあら書しす実記」

虫喰いによって全文が明らかになるわけではないが、噴火とそれに続いて起った川への泥押しがいかに広範囲に及んだかを、流域村々の支配別、流失田畑、流失人数などの摘記で表現している。実はこの表現と同様の災害絵図を同じく旧矢倉村で一点、隣村の旧中之条村で一点確認できるとい<sup>(11)</sup>う。被害村々についての摘記内容から写し廻されたものであることがわかるという。流域村々の間では、こうした被害について他人ごとならぬ内容であり情報は共有されたことが絵図の残存状況から類推できる。

○浅間C-12-(1) (図21)、浅間12-(2) (図22) (三井文庫蔵)

南麓を含め北麓一帯の降灰の範囲を示す掛絵図である。「しんまちみつ井け」の朱印があり、浅間C-4と同様新町三井家において昭和5年に購入されたものであるということから、噴火当初から越後屋の資料とされていたものではない。ここでは、北麓の被害範囲を示す他のものと同様の絵図の上に、降灰と灰の絵を貼り重ねる表現の工夫をみる意味で取り上げた。原資料では、この形式を「掛絵図」と称している。本稿では、これによって、地変を描く重ね絵を掛絵図と称することにした。

### (3) カテゴリーD

浅間山噴火に関する、著者、出版人などを記さない木版刷、いわゆるかわら版類は一般には少ないと考えられている。かわら版の発生について、元和の大坂城落城時の合戦図を除くと、ほぼ天明の浅間山噴火前後から、漸く江戸において木版刷りのかわら版が確認され始め、都市社会の人間関係の変容と見合うと理解されている<sup>(12)</sup>。

かわら版類のうち、災害に関するものに限定してみると、その情報の中心は災害発生による人々の受けた被害を中心とする。これは、かわら版が民衆間でのアンダーグラウンドの出版物であるという特性の表出でもある。

こうした理解に立つと、次に示す浅間山噴火に関する二点のかわら版は、これまでみてきたカテゴリーCに共通した基本構図を利用しながらも、伝聞情報から人々が一体どうしたのかを想像力によって絵画的に補い、表現していると推定される点で興味深いものがある。

#### ○浅間D-1 (図23) (三井文庫蔵)

浅間D-1は南麓の降灰の被害を中心とする。次に示すD-2は北麓の被害を中心とするが、共に江戸での火山毛の降下を述べている点などから、江戸で出版された南・北両山麓の被害の全貌を伝えるセットものと考えられる。

D-1では、「此へんいしすな人をそんじる」「此へんすなまじり石ふる」「此へん大石あまたふり人そんじ家は□くつる」として、人や動物の逃げ去る様子が稚拙ながら描かれている。利根川沿いの渋川、前橋、伊勢崎、荒川上流の熊谷、鴻巣あたりの降灰量までも盛り込み、最後に「江戸すなかなかに白き家まじりてふり申候」と結ばれる<sup>(7)</sup>。

#### ○浅間D-2 (図24) (三井文庫蔵)

このかわら版は、浅間の北麓の吾妻川沿いの泥流を描くカテゴリーCの場合と異なる点がある。吾妻川の洪水源を浅間噴火の火砕流ではなく、<sup>あづま</sup>四阿山に求めている点である。恐らく、鎌原火砕流が吾妻川に流れ下ったことが原因という情報が得られない段階で、吾妻川の上流の四阿山でも爆発したと想定されたのであろう。「わがつま山 浅間山裾通りの山也」と注記され、更に「しゃぬけ出、大水泥吹出し候事」と説明されている。北麓の噴火絵図と同じく、中仙道と吾妻川が描かれているが、「わがつま山」から、火砕流か泥流が川へ流れ込む図となっている。「此所四十三ヶ村不残流し人死数不知」「すまんの人死」「此川筋人馬流たる事かすしれず」など注記され、浅間D-1と同じく、浅間の裾野には人と動物の逃げ惑う姿がスケッチされている。

一般に、浅間噴火に先立つ10年程前の明和9年(1772)の目黒行人坂の大火を刻したかわら版がこの時期のかわら版の出現例として早いものとされている<sup>(13)</sup>。後年火災のかわら版で定着するようになる、既成の地図に焼失範囲を朱で示す体裁のものはこの時出版されていない。類焼した大名・旗本の屋敷、町名などを文字で綴っているものが中心である<sup>(14)</sup>。

浅間山噴火のかわら版でも、領主や代官所毎に村々の被害書上に情報源を求めたと考えられる文字による被害情報中心のものや、被害地域の概略の地図情報に終始しているものも残されている<sup>(15)</sup>。今回これら浅間D-1、浅間D-2のような表現力豊かなかわら版が確認されたことで、領主や幕府への被害書上のリークに基づく被害情報に終始する文字だけのものから、かわら版の作り手の想像力が許される絵図情報のもので、すでにこの頃から多様な内容のものが出版されていたことが確認

された。また、これらのかわら版を通して作り手の自由な想像が取り込まれると、かわら版としての精彩を増すことも確認できた。

### 小 括

以上、みて来た浅間山噴火に関する災害絵図から浅間山の噴火の災害情報の特徴について簡単にまとめておく。

- ①カテゴリーBでは、行政単位としての村落の領域での被害を主として田畑の被害を中心に報告されている。
- ②カテゴリーCでは、災害発生当時における絵図の作成者や所蔵者、その伝来経路などについて細部の検討を経ていないものもあるが、総じて描かれる対象の大きささまざまな差異によって、この災害に対する作成者や観察者の立場や関心の所在が反映されていることは確認できる。浅間山噴火ではこのカテゴリーCに属する例が多く、またそれらがBの立場を担う人々によっている点も、この時期の情報のルートを示唆していると思われる。
- ③従来、天明の浅間山噴火のかわら版は幕末に比べ残存率も当然ながら低く、あまり言及されることがなかった。しかし、荻原進氏の「浅間山天明噴火史料集成」V雑編にも6点のかわら版が収録されている。もっとも、このうちには、「よしや版文字瓦版」の(一)、(二)、(三)とされるものは、東京大学社会情報研究所蔵小野秀雄コレクションに含まれるものと同一である。但し、小野コレクションでは上記(一)、(二)が一紙に刷られている。したがって、点数としては少なくとも五点あるいは四点の可能性もある。

また文字情報のみでも、『砂石雷電記』（三井文庫蔵）のような見聞情報のみのものや、小野秀雄が『かわら版物語』の口絵に引用し、その類をみない強い線に、実際に瓦に刻されたものかもしれないとした噴火図を含めると、ここで多様なかわら版が確認できることになる。

これらのものが出版された場所は、江戸のような有力なかわら市場のみならず、降灰地域に含まれる幾つかの城下のような購買層を想定できる都市を考えてよいだろう。今後の調査によって研究が広がる領域としたい。

## 3. 寛政4年(1792) 島原普賢岳噴火

この災害は、寛政4年(1792)4月朔日のいわゆる島原大変の半年も前から群発地震があり寛政4年1月に入って噴火が始まった。その後、断続的に噴火・地震があり、溶岩は山腹途中の村近くまで迫った。ついに4月1日、地震と激しい鳴動とともに、普賢岳の前であって城下を抱えるように存立していた眉山が大崩落を起し、海中に入った大量の土石によって津波が発生、島原側約1万人、肥後側5000人に及ぶ死者を出す、近世でも最大の被害となる災害であった。

この災害の絵図については、火山学の立場から、文献史料、絵図を分析した研究や、歴史学を含め地理学、地質学の分野での共同研究によって、地変を描く絵図の綿密な分析が行われ、火山学的研究に絵図の有効利用が証明されている<sup>(18)</sup>。

ここでは、そうした成果に依りながら、しかし、そこでは分析対象にはならない普賢岳噴火図の二、三例を先のカテゴリーに沿って位置付けておくことにしたい。

## (1) カテゴリーA

前項の浅間山噴火絵図群では、カテゴリーAつまり藩が幕府に報告するなど公的目的で作成した類に属するものは示すことができなかったが、雲仙普賢岳の例ではAに属するものを数点掲げることができる。島原大変は、噴火の後に山岳崩壊による津波発生という二次災害での地変が大規模であったため、絵図も災害過程を描くための工夫が凝らされたものになっている。以下ではそれらを一体として扱うことにしたい。なお、絵画に描かれた噴火過程については註(18)、(19)の文献によっている。

○島原A-1 (図25) (島原市本光寺蔵)

○島原A-2 (図26) (島原市松平文庫蔵)

○島原A-3 (図27) (島原市本光寺蔵)

島原A-1、島原A-2については、島原藩によって作成されたことが確認され、島原A-3についてもその可能性が指摘されている。<sup>(20)</sup>噴火二百年回忌を期して出版された『たいへん』によって、以下の点が明らかにされている。島原A-1、島原A-2は、本来二枚組で、<sup>(21)</sup>寛政4年(1791)6月3日幕府への被害報告として作成提出されたものであることが絵図の裏書きから判明する。島原A-1は3月朔日の地震で発生した地割れを描いていないところから、大変前図と位置づけられ、島原A-2は、眉山の崩落を描く大変後図とされている。島原A-1は杉谷村千本木地点に溶岩が迫った段階を描く。絵図中、普賢岳右に、地震や鳴動が激しく、地中で大筒を放つような音がある、城の近辺や西北で強く、南では弱かったりする、と注記が一ヶ所書き込まれている。3月朔日の地震以前の状況を示すと考えられている。

島原A-2は、4月朔日の地震とともに大鳴動を伴って崩落した眉山の地変を中心に描くものである。地震毎に谷の地割れが大きくなる、3月朔日後出来た地割筋、4月朔日の眉山崩壊では、「山割れ押出」したこと、その割筋が六筋観察できること、崩落土石で埋った中木場村や女徳村の位置、崩落土でできた流山の大きさ、島原村上ノ原の民家の井戸水が吹き出したことなど、噴火によって起きた地変の観察が客観的に描かれている。

島原A-3は、前二者のように紛れもない由緒が裏書きで保障されることはないが、一見して判るように、溶岩の描き方、崩落した眉山が島原A-1、島原A-2から縮小して描かれていること、島原A-3はこうした眉山の崩落による海中への土砂の押し出しを描き、津波の侵入域を黄色で示し、各村の村境、河川への津波遡上高などが書き込まれている凡例が示されるなど全体の被害が伝統的技法で描かれていることから、幕府への提出図の可能性が指摘できる。この図は、島原A-1、A-2とは、視点を異にし、現実には当時不可能であった真上からの半島図と俯瞰の視点を取り混ぜ、必要な情報を盛り込もうとしたものである。

いずれの絵図も大地変を客観的に正確に伝えるという使命に対して訓練された表現方法で、感情を抑制して応えようという絵師の気持が画面から立ち登って来るような絵である。

民間の絵には、大変をいかに大変として伝えるかという感情移入が過多であるのと比べると、大きな違いが感じられる。

なお、島原A-3のような視角で描かれた噴火絵図は、他に、安永6年(1777)伊豆大島の噴火図<sup>(22)</sup>や安永8年(1799)桜島噴火図<sup>(23)</sup>に例がある。

## (2) カテゴリーC

ここでは、筆者不明の二点を掲げる。

### ○島原C-1 (図28) (東京大学地震研究所蔵)

島原C-1は地震研究所に蔵される「寛政四子年肥前国嶋原山々燃崩城下町々村々破損之図」である。これについては、片山信夫「島原大<sup>(24)</sup>変」で、詳細は検討がなされ、熊本側から描かれたもので、島原側の記録と一致する内容の他、眉山の崩壊について独自の観察眼で状況を把握している点があるとして一定の評価がなされている。

### ○島原C-2 (図29) 作者不明「島原図」(地震研究所石本文庫「後見笑」所収)

本図は、熊本側の被害を綴った文中の挿図である。図中に伝来が記される。

「此図ハ島原御領山田村法性寺ノ僧子四月四日高瀬町へ来ル、此図所持大ニ秘シカトモシイテ  
(望か)  
所届コレヲウツス 後見ノタメ爰ニウツス」

として、島原藩領の僧が持ってきていた図を是非にと所望して写し取っておいたものだという由来が判明する。外題は後見笑と題されるが、内題は「後向笑」(うしろむきわらい)と題する遊行寺院系の僧の寛政期を中心とする見聞記である。

## (3) カテゴリーD

### ○島原D-1 (図30) (東京大学社会情報研究所蔵)

木版刷のかから版である。九州九ヶ国に地震があり、天草「いわうじま」の大地割れと火口よりの溶岩の噴出と大石大木の噴出、「うみのそこを火くぐり、なみをこへ、…舟みなしづみ、魚るいはらわたをかへし、大魚小魚ハくがに打ちあけてすぎましく、」と津波の発生による被害までを伝える。末尾に「さて、そのいわうのけむりにむせて、中こくの人々大きニくるしむ」とある。これは、上記の絵図類とは異なる情報源に基づいて作成されたかから版である。説明の文面から推定される点は、作者の実見によるものではなく、伝聞情報を筆力で補ったものであろう。しかし、簡略な表現ながら災害の凄惨さを語り、迫力がある。

### 小 括

以上、島原普賢岳噴火では、カテゴリーAの事例の客観的記述、洗練された絵画的表現に対して、島原C-1の例にみられる「大変」の心情的表現への傾斜、島原D-1にみられる伝聞情報を想像力で補う絵画的表現など、各カテゴリーが持つそれぞれの特性が対置できた。

## 4. 弘化4年(1847)善光寺地震

善光寺地震については、藩庁において作成したと推定されるカテゴリーAに属する大絵図とカテゴリーDに属する例を検討することにした。ここでは前二項では対象例がそれほど豊富ではなかったD類を例示し、BおよびCはこの災害において、事例を掲げることに不足はないほど豊富であり、この時期の地方文書群BおよびCを担う層の厚さは、もはや周知の事実であるから省略した。Aに関わる人間が、そこで得た情報に基づいてD類を出版するという災害情報の持つ特性についても考えたい。

## (1) カテゴリーA

### ○善光寺A-1 (図33) (真田宝物館蔵)

この災害は弘化4年(1847)3月24日の地震で虚空蔵山の山体が崩落、山裾を流れる犀川を崩落土砂で埋め、湛水20日後崩落土砂とともに湛水した犀川の水が善光寺平一帯に流れ、千曲川流域の飯山に至るまで広域水害をもたらした。死者8000人以上といわれる大きな災害である。<sup>(25)</sup>前項で検討した島原の普賢岳噴火同様、複合的な災害であった。したがって、災害がその一連の過程を完結するまでに20日という時間経過を要している。このことは、災害絵図のあり方にも少なからざる影響を与えた。島原の場合は前・後図と分けて災害経過を説明した。松代藩の場合はどうであろうか。

善光寺地震の場合のカテゴリーAに属するものとして松代藩真田家文書の「信州地震大絵図」を挙げる。縦190cm、横420cmの大絵図である。ここに盛り込まれた情報量、被害地域の描写、構図の取り方などを勘案すれば、公的な立場から得られる情報を踏まえ、描かれる対象に対して一定の基準が設けられ、それに基づいて描かれたと考えられる。

この絵図について藩が幕府へ差し出すなどしたという記録はいまのところ見出されていない。また凡例なども認められず、幕府に提出するなど公式の書式に則ったものではないと考えられる。島原普賢岳の噴火の場合は、藩日記に記録として留められ、幕府から復興資金の拝借金を受ける資料の根拠とされた。松代藩の場合も大災害であったため直ちに復興のための拝借金願が4月18日に出された。4月28日には金一万両の拝借金が許された。異例の早さというべきか。藩主真田幸貫は定信の次男であり、前の天保改革時老中を勤めていたという点が大いに有利に働いたとする推量も見当はずれのものではないだろう。次いで、5月1日には千曲川の洪水では国役普請も願い出ている。これも9月末可能になった。しかし、拝借金願の時点で大地変、大災害について急遽絵図を仕立てて幕府に状況を伝えようとしたというような記録を見出していない。したがって善光寺A-1の図がこの時出されたものとするには無理がある。

この絵図について自然地理学の立場から地震による崩壊と地入り常襲地帯との関係を善光寺地震災害研究グループ(斎藤豊代表)が詳細に分析している。<sup>(26)</sup>この絵がどのような目的で作成されたのかについて、鎌原桐山「地震記事」中に以下の文言があると指摘されている。

「雇足軽大岡村の産新左衛門、此度変災に地図被仰付られ仕立差出す。松本飯山辺までも委細に彩色分にして出す。御参府の時御持せあり、新左衛門は樹芸方手付也」<sup>(27)</sup>

藩主幸貫は災害発生によりこの年の6月の参府の延期が認められ、8月28日に参府のため松代を出ている。これによれば、藩主が江戸へ携えていったことは事実としてよいということになる。他に、「御側御納戸日記」(国立史料館蔵)嘉永3年(1850)9月12日の条には「地震之御絵図」が田安家から返却された旨を記す簡条がある。恐らくは藩主幸貫が自藩の稀にみる大地変、大被害を呢懇の大名たちに説明するために用意されたのだろう。すると、現在真田家文書の一群に含まれている「信州大地震絵図」が、弘化4年藩主が江戸に携行したものだとしても、これが、幕府に提出されるようなものではなかったとはいえるのではないだろうか。

この絵図に含まれる地域は、越後高田方面を除くと、被害の出た善光寺領、松代藩、飯山藩、須坂藩、幕領、松本領、上田藩領域に及び、松代藩内だけで情報が集められる範囲を超えている。また、たとえ情報が収集されたとしても幕領や他藩の被害を一紙にして、松代藩が幕府に提出すると

いうことは、この時代においてはあり得ない。したがって、この絵図自体は藩内部において災害全体を把握するための資料として活用されたに留まると考えることが妥当だろう。

しかし、なお依然として残る問題はどのようにして被害地域の情報を絵図に盛り込んだか、その作業過程である。絵図によって概略被害の様相は、虚空蔵山崩壊と犀川湛水の震害を示す西半分（朱色が土砂崩壊を表わす）と堰止めた崩落土砂が決壊して起きた千曲川洪水域（茶色で洪水色が示される）の東半分に大別されることは明らかである。この災害による死者数は8000人を超えると推定されている<sup>(28)</sup>。このうち、松代藩領の死者は2707人、洪水は一日で水が引け、溺死は22人で、圧倒的に地震による山中村々での死者が多い。震災直後山中村々へは藩の役人の調査も入り兼ねる状態であったが、藩への報告には、犀川の湛水も含め粗絵図が被害の概要に添えられたという記録がある<sup>(29)</sup>。こうした緊急の報告が、右の絵図にどれほど活用されたのかは今のところ不明である。また、当時の家老河原綱徳の『むし倉日記』によれば、他領の被害情報を密偵を飛ばして、積極的に集めている<sup>(30)</sup>。こうした前提があって、大絵図に仕立てる基礎情報も収集されていたと推定されるが、後日を期すことにしたい。

#### ○善光寺A-2（図34）（真田宝物館蔵）

被害概要を絵図に仕立てた以下の災害絵図の一群は、災害後の地変をまさに今日いう写真として留めておくという発想から、領主の巡行に随伴した御抱絵師が作成したものである。但し、青木雪卿の絵師履歴については不明な点が多く、この絵の制作を跡付ける公的日記上の記録が見い出されていない。

この絵図についても、善光寺地震災害研究グループによる詳細な検討により（図31, 32）、69図すべてにわたって描かれた場所、巡行順序、現在該当する地点の地震の名残りなどが写真に納められ、主に地形学的観点に立った比較検討がされている。

検討の結果、以下の点が明らかにされている。

- ①藩主幸貫は地震後3年した嘉永3年（1850）5月と翌4年（1851）4月に震災後の巡見を行い、それに随行した御抱絵師青木雪卿が67枚（2枚は同じ場所）を描いた。
- ②巡見コースは、震災の激しかった所が選ばれている。当時の家老職にあった河原綱徳がまとめた「むし倉日記」に激甚地として記録されている箇所が多く含まれる。
- ③但し、藩主の巡見コースからはずれた地域は対象からはずされている。
- ④残された絵図の他に、すでに紛失したものの可能性もある。つまり、69図がすべてではない。
- ⑤震災後3年経過の状況で、地震直後の崩壊地が既に耕地化されたり、倒壊家屋も一部復旧されている。

しかし、自然地理学的観点から本絵図と左記のA-1を併せ検討することで、松代藩領の山中の地震崩落・被害と地亡地帯との比較検討、耕地化、植生の比較などを行う上で極めて有効な資料であるとしている。

また、美術史の立場からこれら一連の青木雪卿筆の画帳「感応公丁未震災後封内御巡視之絵図」（以下「御巡視之絵図」とする）を分析した景山純夫氏によって、新たな見解が加えられた<sup>(31)</sup>。それによれば、ここで必要な論点は以下の点にまとめられる。

- ①青木雪卿の一連の「御巡視之絵図」が描かれたのは、藩主による善光寺地震の被害調査のために特

別に設けられたものではなく、定例の藩主の領内巡視によるものである。

- ②定例巡視の一環であったことを証するものとして、既に仁科淑子「松代藩主の西山中巡覧記」<sup>(32)</sup>において、善光寺地震のために繰り延べされ、嘉永2年(1849)3月、4月、閏4月の三度に分けて行われたことが明らかにされている。但し、絵図作成は嘉永2年の巡視随行から着手されたかもしれないが、完成はその後の二回の定例巡視を経た段階と推定される。
- ③したがって、69枚の作品は震災後の地変を描く目的を兼ねてはいるものの、それだけのために描かれたものではない。
- ④藩主幸貫は父定信の姿勢に倣った政治を採りたいという意図が強く、「御巡視之絵図」も定信が海防巡視の折、谷文晁を随行させ描かせた著名な「公余探勝図」に模した要素がある。
- ⑤しかし、「公余探勝図」もそもそも純粋に海防策の資料としての効用があったかどうかは疑問であるとするれば、それに倣った「御巡視之絵図」も風景画集として位置づけてよいのではないか。
- 以上の見解についてここでコメントを加える余裕はない。が、当時の制作意図が必ずしも災害絵図の制作でなかったにしても、現在わたしたちにとってどのような意味をもたらしてくれるものかは別に論ずるべき余地はあると考えたい。

善光寺A-2の青木雪卿の絵図に限らず、松代藩では、ペリーとの浦賀での交渉を藩の御抱絵師を役人としてすべり込ませて会見当時の様子を絵画に仕立てるなど、絵師を重用した伝統があると考えられる。青木雪卿の絵図は、透視図法と伝統的筆遣い、色彩の配置を通して、当時の崩落土の土質<sup>(33)</sup>の類推も可能な程精密な描写だと評価されている。

以上は島原噴火のカテゴリーA同様、こうした専門絵師の観察力、描写力が質の高いものであり、現代においてなお有効性を持つ例として、歴史学以外の分野で逸早く活用されている例とすることができる。

しかし、善光寺地震はそうしたものばかりではなく、Dのグループの例の豊富なことにおいても特徴的だといえる。

## (2)カテゴリーD

ここでは、Dに属する幾例か異なるタイプのものを掲げ、幕末のこの時期、地方でも災害に際してさまざまな摺物が出されたことの意味を考えることにしたい。

まず、かわら版とは言えないが三色彩色の木版災害図善光寺D-1、善光寺D-2を検討する。次いで、地方で出版された地変を伝える素朴な絵図善光寺D-3、D-4を示すことにしたい。

○善光寺D-1(図35)(真田宝物館蔵)

○善光寺D-2(図36)(真田宝物館蔵)

善光寺D-1と善光寺D-2は、善光寺A-1「信州地震大絵図」において、震災と20日後の水害が色分けされ、一紙にまとめられていたが、ここではそれが震災と水害の2枚に分けて表現された。したがって、2枚で一つの災害の過程を表現するセットの絵図である。この絵図は、江戸日本橋通三丁目山城屋佐兵衛と信州善光寺大門町蔦屋伴五郎、上田海野町上野屋三郎助の出版元の記載があるもの(真田宝物館蔵)と上田海野町上野屋三郎助の名がなく、前二者のみ(京都大学博物館蔵)の二版を確認している。比較的多くのところに見い出される絵図であるから、もっと多くの異版があ

る可能性は十分ある。

善光寺D-1絵図の説明文の序において、「信中 平昌言識」と記され、この図の作者が記名されている。平昌言及びこの図の製作過程について、寺沢章「岩倉山崩壊時の犀川湛水面」<sup>(34)</sup>で考察がなされている。それによれば平昌言は文政3年(1820)生れ、弘化地震当時28歳のもっとも活躍的な年代の青年で、「史家として卓越せる識見を有したばかりでなく、地理学者としても其手腕を發揮した」<sup>(35)</sup>とある。上田領上塩尻村伝兵衛の息であり、原姓を名乗り、寺沢論文執筆当時原図は同村の原氏宅に存したということである。更に、「小県郡史余編」<sup>(36)</sup>によれば、「博学多聞」であったこと、安政元年(1854)庄屋となり村事に奔走し、明治4年(1871)塩尻村戸長となった。また、この震災地図作成のため、各地を実測製作したと記されている。更に先の寺沢論文には、

「翁が調査の発端は当時松代藩月番家老であった河原綱徳の命であって調査の為には全く身命を屠して奔走したものであるといふ。」<sup>(37)</sup>

と記す。

この地図の製作に関わった人物の片鱗は捉えられるが、以下の疑問が生ずる。

- ①上田藩の村役人となるべき人物が他藩の測量を自由に行い得るか
- ②松代藩家老河原綱徳が原昌言に地図の作成を命じたというのは、この木版2枚セットの図かこれらの論文や記述からは、直接上記の疑問を解くことはできない。

まず、善光寺A-1と善光寺D-1、D-2を比較して、相違する点を明らかにして、各々の特徴を抽出することにしたい。この作業の前提として、上に記した私の①・②の疑問を次のような推測で解決しようと考えたからである。

- ③河原綱徳は、測量技術と学識を持つ原昌言に、A-1作成のための協力を依頼した
- ④その結果を基本にして、販売するため絵図を作り、原昌言が作者として売り広めることを黙認した

善光寺A-1と善光寺D-1、D-2の絵図の比較の結果の概略は以下の通りである。(但し、比較は被害の中心地である犀川筋と千曲川兩岸の洪水地を中心とした地域に限った。)

形態：A 一紙(192.2×419.2cm)

D 二紙(90.0×88.5; 90.0×66.5)

製作時期：A 弘化4年8月中(藩主幸貫の参府時)

D 弘化4年10月以降(D-2の説明文の余震記録 弘化4年10月末)

範囲：A 他領の松本藩領内は自藩と色遣いを異にする

D Aにはない佐久郡から小県郡、上田藩領域も図示する、但し、震害はない

被害地：A 被害の地変を中心に色分けなどで表現、列挙村名少数、但し、犀川流域の湛水地、山中震害地辺の地名はDと照合例多い

D 列挙地点は村名、宿名の他、古戦場、仏刹、神社なども記入

凡例：A なし

D 被害村宿名に焼失(朱)、洪水(藍)、潰家(黄)などで色付けて、表記

地図上の工夫：A 松代藩領の被害範囲を中心とする。点在する幕領の被害を描く

D 須坂藩、飯山藩など北西部についての省略。作図上の変形は飯山藩領方面で

著しい

その他の情報：Dは殆ど山名を記し、温泉地を記入、寺院の開帳情報、「平コレモチ戸隠、鬼ヲ切ル」などの故事来歴を記入

以上を通じて、上田領塩尻村（松代領と隣接）出身の原昌言がDを作成したとする点に結び付く内容が若干浮かび上がる。

- ①原昌言は、災害図としては入れる必要のない自藩領域を図示した。
- ②松代藩家老の命を受けて測量したという点が事実とすれば、測量範囲は犀川湛水域か山中の被害地が主であったことがA、Dの被害村名の照合率が多いことに表われている。
- ③Dにおいて千曲川が蛇行する須坂藩、飯山藩領の変形省略が著しいのは、原の測量担当範囲に含まれなかった。

以上は、AとDとの比較から得られる推測を先述の疑問に結び付けて解決しようとした結果である。しかし、この図が江戸、善光寺町、上田城下で売り広められることが原昌言個人の名において黙認される背景については、ひとつの有力な情報が原昌言氏のご子孫の方から得られた。河原綱徳の孫娘は原昌言の息子の嫁になったということであった。つまり両家は姻戚関係にあるということである。村の有力層と藩士が姻戚関係で結ばれ、地方の事業の興隆に関与する例は少なくない。震災の調査もこうした形で進められたということは納得できる。なお、その後の調査により、原昌言の生家において、この災害絵図に関わる幾つかの資料を発見した。詳細な検討は別稿に示したが、ここで要点のみ摘記しておく。<sup>(38)</sup>

- ①原昌言（1820-1886）は、江戸に住む桑原孫之丞なる人物を介して、湯島の学問所へ出版許可願を出した。
- ②その結果、弘化4年（1847）8月に出版許可が降りた。
- ③出版許可のため提出された原図に「学問所改」の押印が押され、原昌言に返却され、原家に蔵されている。
- ④原図に比し、数点の異版が確認された。
- ⑤版元の一人江戸日本橋通二丁目山城屋佐兵衛は、通町組に属する書物問屋の一人である。また大阪の秋田屋大右衛門なる版元が加わる異版もある。

以上、出版物に関しては、確実な情報が得られた。しかし、原昌言が「信州地震大絵図」の作成に関与したことを確証できる資料は得られなかった。

さて、そこでカテゴリーA、B、C、Dのうち、19世紀の中期に至ると、Aに直接BあるいはCの立場の人間が関与してDつまり、販売することが可能になるという事態に立ち至るのはなぜかという一般論から問題を考えておきたい。

これは図は示さないが、「信濃国大地震火災水難地方全図」は、同じく簡略に犀川、千曲川沿いの被害地域を図に表わしたもののだが、

「遠境の諸友より右の実説を問ふ事しははにて、いちいち筆にまかせかたきをもてあらましをしるして梓にものにするになん、尚足らざるハ見る人ゆるし為へ 稻荷山住 宮匠」<sup>(39)</sup>  
と記され、同じく遠方の人に災害を知らせるために地元で出版されたものである。これには朱書で「ミな月末つかた彫成いまた昼夜に五七度震やます」と付記され、余震の止まない不安を摘記して、

現在進行形の災害であることを訴える。出版の時期は6月末以降と推定される。

また、同じタイトルで、構図も変わらないが「裾花川七月廿一日切ル」と、上流の土砂崩壊で埋まった裾花川が決壊したことを伝える記事が挿入されたものがあり、版を重ねたことが確認される。これらの記述から、この震災について、一体何が起きたのか、地元に限らず江戸その他の地域での関心が極めて高かったことが判る。他領の人間がなぜ詳細なD-1、D-2のような被害図を出版できたかという問題に戻れば、こうした世の関心に応える意味で、測量に協力してくれた原昌言に対して、松代藩家老河原綱徳は、原が測量過程で得た情報を公にして詳細な被害図を刊行することを黙許したという可能性が考えられる。他領の個人が、個人の資格で刊行することで、被害域に含まれる松代以外の幕領及び他領の情報を盛ることの問題が免れる、問題が生じても藩の立場は非難されない、なお且つ針小棒大にするような流言の発生を防止できるなど、勘ぐれば、こうした措置の利点は少なくないのである。このような前提に立つと、D-1、D-2にはA-1に大きく描かれている高木清左エ門代官所浅川村（現在長野市浅川）の土石流被害地域の情報が描かれていない点についても説明が付くのである。幕領の被害であるため、意図的に描くことを避けたのではないかということである。

さて、次も地方出版である。

○善光寺D-3（図37）（東京大学社会情報研究所蔵）

稚拙な彫りと素朴な表現ではあるが、地震後の最大余震時に出版されたものと推定される。犀川はまだ決壊前である。山の崩落と「此あたりしらうみになる」と千曲川辺の水が干上がってしまったことを描いている。地元で出されたものと推定する根拠は、全般的な稚拙さということの他に、最大余震時を報ずる、震災の衝撃が画面全体に表現されるなど体験に基づく判断されるからである。

○善光寺D-4（図38）（真田宝物館蔵）

これは、災害絵図ではないが、後筆で、「右ハ板鼻宿ニ而読売仕候」と添書があることから、ここに掲げた。つまり、地方、しかも震災地と江戸を結ぶ中仙道沿いの宿でこうしたかわら版が売り出されている点をなによりも明瞭に物語る事例だからである。

### 小 括

以上を通して善光寺地震の例から、この段階では地方で多くのかかわら版が出されていること、そうした出版事例の累積状況のなかで藩の側にとっても歪曲されない被害情報を世に送ることを必要と感じ、善光寺D-1、D-2のような情報内容も豊富で且つ精彩のある災害絵図が出版されるに至る事情を推定することができた。しかし、善光寺D-1、D-2は災害情報であると同時に今日的意味では観光情報、当時の類例で言えば各所案内の要素も否定できない。災害あるいは災異、地変の類が各所案内と重ねられて行く地理情報であることを示すものといえよう。

## 5. 安政東南海地震（1854）・安政江戸地震（1855）

安政東南海地震と安政江戸地震の安政期の二度の災害は、災害かわら版が多量に出版された点では江戸時代の最後にして最多量を画するものであった。

以下では、既にこれまで各所で論じられてきた安政期の二大災害の災害情報<sup>(40)</sup>について、上述のような認識に立った上で、1～4でみてきた災害絵図のうち、カテゴリ-Dを代表する二つの事例を挙げ、まとめとすることにしたい。

安政東南海地震が安政元年（1854）11月4日、32時間措いて11月5日南海地震が発生し南海から東海に至る太平洋岸の城下、村々を中心に大きな被害が出た。この災害で東海道は吉原、江尻、清水湊、掛川、袋井、舞坂などの宿が焼け、三島近辺で小林村が陥没、津波による潰家などで、通常の飛脚継立が一時停止した。このため江戸は、箱根以西、南海地方の被害の様子が伝わらず、一時情報の空白状態に陥った。しかし、この時の各地の津波被害を伝えるかわら版は多数残されている。かわら版の出版元は記されないが、大坂で出版されたものが多いと推定される。これについては、災害情報の内容から、

（イ）生活圏を共有する地域情報

（ロ）同一経済圏内の広域情報

（ハ）更に九州から関東の太平洋沿岸域の被害を伝える全国情報と日を逐って拡大して行くあり方

を指摘し、この情報源が四国、中国、九州筋諸藩の飛脚中継地点である大坂で得られたこと、したがって大坂で多くの地震津波に関するかわら版が出される理由があったことなどについて考察した。また、それらの多くが対象域の簡略な地図を描き、それにくずれ、つぶれなどの被害の概略を記すにすぎないが、東海道の被害と宿の機能回復に関心を持つ人々には一定の必要な情報が得られるものであったことも指摘<sup>(41)</sup>した。ここで多用された地図類は、ほとんどがデフォルメされたものであり、そこに著名な山岳、城下、神社、仏閣などをランドマークとして、必要な被害情報を街道沿いに摘記する点では、安政東南海津波の全国情報の例 **安政D-1**（図39）（東京大学地震研究所蔵）は、既に示した善光寺地震**D-1**、**D-2**の例と基本的に変わりない。未知であれ既知の土地であり、“名所”の構成要素である山、川、寺社などを核としたこうした空間認識は既に、広く人々の間で共有されていたからこそ、被害情報自体が精度を欠くものであっても、“事件”の事実は表現された通りに人々に受け取められたと考えられる。

江戸地震の場合はどうか。

この地震では江戸全体に及んだ被害を表わすために既成の江戸全図が使われた。こうした事例は、それ程時代を遡ることはできない。江戸では、明和9年（1772）目黒行人坂火事で、既成の地図を利用して焼失域を朱で手彩色したものが、かわら版災害図としてはもっとも早い例に属するようである<sup>(42)</sup>。次いで、半世紀を経た文政12年（1829）3月21日の江戸大火かわら版を確認できる<sup>(43)</sup>。大坂においても、寛政3年あるいは4年の大火において木版刷りの大坂の地図に類焼地域が墨塗りされたものがこうした類の早い例と考えられる<sup>(44)</sup>。しかし、京都では既に寛文13年（1673）5月8日の火事で、既刊の地図に手彩で朱塗りを施したものが出されている。江戸より一世紀も前である<sup>(45)</sup>。文政13年（1830）の京都大地震では、京都の地図に崩壊所などを色分けして塗るかあるいは刷り込んだものはいまのところ見いだされていない。

**安政D-2**（図40）（東京大学地震研究所蔵）は、江戸地震の崩れ場所・焼失場所を既刊の江戸全図に朱で示したものである。江戸城などタブーとなる地点を含む災害図は作り手も容易に手を出さ

なかったと考えられるから、江戸地震で大名小路辺の幕閣の中枢部の役屋敷の焼失などが比較的正確に図示されている点は画期的なことと考えてよいように思われる。江戸城内については、大坂で出版されたものが「御無難」と書き入れているものを除いて、江戸で出されたと思われるものには無難とも崩れとも書き込まれているものはない。現在に至るまで、安政江戸地震での城内の被害は信頼できる記録がなくて分からない。火災の情景図を添え、大名屋敷、武家屋敷を含め、文字を連ねて崩れや類焼の事実を表わすかわら版は多数出版された。元来、江戸時代の都市図、特に江戸図は武家居住者は刻されるが、町屋内の情報は町域の区画が刻されるのみである。こうした基調の地図上に書き込まれた情報が大名・武家屋敷に集中している点は、この図の利用目的、人々の関心がどこにあったのかを暗示している。災害情報が民間で出版されたことについては、善光寺地震の事例で述べたように、暗黙の了解のもとに許容される災害情報は、むしろ積極的に世に流されなければ却って流言の類の社会不安を募らせることが予め計算されていたからである。もちろん、大名や武家屋敷内の死者数に言及するものはかわら版の類では見られない。したがって江戸全体の死者数や被害町数はいかにも誇大な数値が示されるが、こうした点での被害を全江戸というような地域的な概念で把握する必要のない社会空間であった。だから、そもそもそうした被害の正確な統計数値が存在しないのである。

しかし、巨大災害は人為的に区切られた空間に関わりなく、地球規模で発生する。所与のものと同観念される社会空間に生きる人々に災害が地理空間の連続性、一体性を認識させる契機となると考えることはできないだろうか。その意味で、安政D-3(図41)(東京大学地震研究所蔵)は象徴的である。これは専らこれまで地震鯨絵の由来を示す竜絵として引用されてきた。しかし、本論文脈からは異なる点で注目される。安政元年(1854)の地震津波と安政2年(1855)の江戸地震の震動域を色分けして示している。詞書によれば、文政13年(1830)京都地震の際刊行された小島濤山「地震考」に掲げられている竜絵のいせこよみに倣ったという。小島濤山自身は、「伝建久九年いせこよみ」をそのまま使用している。この図の竜が守る日本図が行基図系日本図であることから、地図学の分野から、こうした竜絵は中世以来地震のあった年に暦として刊行された可能性があると指摘されている<sup>(46)</sup>。もしそうであるとすれば、竜の呪力で国土が守られることを願った、こうした類の災害図はもはや安政期を最後に刊行例がなくなることもこれまた極めて象徴的だといわねばならない。地震や火山噴火などの自然災害が地球規模で把握される時代に突入するからである。

## まとめ

以上、18世紀後半の浅間山噴火において、災害の被害を報告する役割を担う村役人の許に集められたカテゴリーB情報や、そうした情報の周辺にいる人々が個人的関心から相互に情報交換が(カテゴリーC)盛んに行われたこと、同じく18世紀後半の雲仙普賢岳の噴火においては、災害による地変を説明する精度の高い内容の領主サイドの情報カテゴリーAの実際とこれに対置される民間伝聞情報(カテゴリーD)の質的差異が明らかになったこと、善光寺地震例では、カテゴリーAの情報収集に従事した同一人物が、カテゴリーAの情報内容に更に購買力を高める付加情報を加えて売り出したこと、安政期には、災害を通して個別的被害に終始しない地理的認識の拡がりがかかわら版レベルの災害情報でも顕著になったことをみてきた。災害絵図を基に情報の分類を行うことで情報

が発信主体、対象、目的によって明白な差のあること、また、実際の災害事例を通してそうした生成過程も把握できた。特にカテゴリーDの不特定多数に向けられた情報においてはかわら版が民意に潜む意識の開拓に連なる点も展望できた。

## 註

- (1)——東京大学社会情報研究所 小野コレクションのデータベース化作業は吉見俊哉助教授を中心にヴィジュアル・コミュニケーション研究会が進められている。なお、神奈川大学大学院博士課程富沢達三氏がこの入力作業を担っている。
- (2)——『かわら版物語』(雄山閣, 1967)
- (3)——平井隆太郎 「かわら版の謎をさぐる」『かわら版新聞江戸・明治三百事件』I (平凡社, 1978) pp39-54
- (4)——中山栄之輔 『かわら版選集』(人文社, 1970)
- (5)——拙稿 『安政大地震と民衆』(三一書房, 1983) ; 「たかが瓦版, されど瓦版」『Security』No.61, 1989, pp56-59 ; 「消費される情報, 蓄積される記憶」『鯨絵』(里文出版, 1995) pp63-76
- (6)——高田衛・宮田登編 『鯨絵』(里文出版, 1995)
- (7)——平成9年度群馬県立歴史博物館展示図録 『天明浅間山焼け』
- (8)——(7)の展示担当学芸員古沢勝幸氏の見解に基づく。
- (9)——佐久市並木藤一郎氏蔵の絵図は、殆ど同じ図柄である  
「野沢八郎右エ門義□図之  
同小忠太義□写之」  
とあり、それを野沢村八郎右エ門が写し、20年以上経た文化3年(1806)年に八郎右エ門の子供の小忠太が写したという経緯が推定できる。
- (10)——「三井文庫-沿革と利用の手引き-」による。三井文庫 賀川隆行氏、永井氏のご教示による。
- (11)——(8)に同じ
- (12)——平井隆太郎 前掲論文
- (13)——中山栄之輔 前掲書
- (14)——三井文庫蔵 明和九年行人坂火事に関するかわら版二点
- (15)——東京大学社会情報研究所蔵
- (16)——林美一 「艶色江戸の瓦版」(河出文庫, 昭和63) pp11-20  
林はここで「浅間山やけの図」を小野秀雄が実際に瓦を使って彫った例としたことを凹版と凸版の違いからみてあり得ないことと批判している。また、自家蔵の「浅間岳大焼けの図」を紹介している。
- (17)——群馬県文化事業振興会 (1996) pp197-201
- (18)——片山信夫 科学, 44 (1974) pp566-570
- (19)——九州大学教養部国史研究会人文地理学研究室「九州地方における自然災害の歴史地理学的研究」(1986), なお、島原A-1, A-2, A-3については島原市役所災害復興課平尾明氏のご協力で1997年度歴史地震研究会開催の折、原図閲覧の機会が得られた。
- (20)——(19)に参照
- (21)——島原仏教会編 「島原大変二百回忌記念誌」(1992)
- (22)——伊豆大島火山博物館蔵
- (23)——三浦梅園 「桜島火変説」『三浦梅園自然哲学論集』(岩波文庫) p334
- (24)——月刊「地球」(1980, 6月)
- (25)——善光寺地震については、被害を総体としてみたものとして、歴史学の立場から小林計一郎「弘化四年の善光寺大地震」『長野市史考』(吉川弘文館, 1969), 地震学の立場から文献を被害の地点毎に配置して発震時、震源・震度分布などを推定したものとして、佐山守・河角広 「古記録による歴史的大地震の調査(第一報) - (弘化四年三月二十四日善光寺地震)」『東京大学地震研究所研究速報』(1973)。  
史料集として、東京大学地震研究所編 『新収日本地震史料』第5巻 別巻1, 2 (1988)。
- (26)——『地すべり技術』17巻3号(1991), 18巻1号(1991), 18巻2号(1991), 18巻3号(1992)
- (27)——善光寺地震災害研究グループ 「善光寺地震と山崩れ」(長野県地質ボーリング業協会, 1994) p52
- (28)——日本地震被害総覧(1996) p116 248表
- (29)——所収日本地震史料 pp63-82
- (30)——信濃教育会(1931)
- (31)——景山純夫「感応公丁未震災後封内御巡視之図」『善光寺地震-松代藩の被害と対応』(長野市教育委員会, 1998)
- (32)——仁科淑子「松代藩主の西山中巡覧記」『松代』8号(1995)

- (33)——(26)pp108-109 表9
- (34)——「信濃教育」604号(1937) pp34-50
- (35)——寺沢前掲論文 p36
- (36)——小県郡役所編著 小県時報局(大正12) pp934-935, (上田市立博物館 寺島氏のご教示による)
- (37)——寺沢前掲論文 p36
- (38)——拙稿「善光寺地震の災害情報」『善光寺地震—松代藩の被害と対応』(長野市教育委員会, 1998)
- (39)——東京大学社会情報研究所蔵
- (40)——拙稿「江戸時代における災害情報の伝播課程」『都市災害の情報問題』(東京大学新聞研究所, 1987) pp1-34; 前掲拙稿(1995)
- (41)——拙稿「瓦版の見る江戸時代の災害情報」『首都圏の安全・情報システム』(安全・情報システム研究会, 1989) pp349-388
- (42)——岩田豊樹著「江戸図惣目録」(日本書誌学大系II, 青裳堂出版, 1986) p78に明和9年火災かわら版として3点挙げられている。このうち、既成市販図を利用したとされるものが1点含まれる。
- (43)——岩田豊樹前掲書, p123「方角場所附」, 同一のものは小野コレクションにもある。
- (44)——近世大坂の災害関係資料—火災—
- (45)——大塚隆『京都図総目録』日本書誌学大系18, p10(青裳堂出版, 1981)安国良一氏のご教示による。但し, 安国氏は実物をみていないとして, この時期にかわら版が出たとすることに躊躇を示されたので, 大塚隆氏所蔵の実物を見せていただき, ご解説いただいた。大塚氏の見解では, 寛文12年(1672)開板「新板平安城并洛外之図」を利用し, 版元名のみ削って, 朱引した焼失範囲を示した最初のものとしてよいのではないかということである。但し, 火元が書き込まれていない点に, 多少の疑問が残るということであった。
- (46)——野間三郎「寛永元年刊『大日本国地震之図』なるものについて」『人文地理』17巻4号(1965) pp79-89

#### 付記

1. 本稿は, 1998年11月25日~28日開催された歴博国際シンポジウムでのポスターセッション参加論文に基づく。発表は, 上田和枝(東大地震研), 原田和彦(真田宝物館)と北原の連名で行ったが, 本稿は北原個人の考えに基づいて作成した。本稿作成の過程で上記御二人の多大の協力を得た。
2. 図版中の図1, 図31, 図32については, 村田香澄氏にコンピュータで原図を取り込み作図していただいた。
3. 本稿作成にあたって, 災害絵図の各々の所蔵機関, 個人所蔵者の方々, 関係者に多大のご協力を賜った。但し, 残念なことに, 3. 島原雲仙普賢岳噴火の例示では永青文庫蔵二点の関連絵図の掲載許可を得たが, 現地調査の調整が付かず, 紙面に掲載することができず, 後日を期すこととした。関係各位にこの点をお断りしておかねばならない。

---

## An Essay on the Disaster-Pictures from the Late 18th Century to the 19th in Japan

Itoko KITAHARA

The present study focuses on picture-maps of disasters drawn in the late Early Modern period. We will see how a disaster is depicted on the picture-map and what kind of information it is supposed to convey to the reader. Through the analysis of the disaster-pictures, we will understand the socio-informational structure of that time. The cases of the following four disasters will be discussed : 1. the Eruption of Asama Volcano (1783), 2. the Eruption of Unzen Volcano (1792), 3. the Zenkoji Earthquake (1847), 4. the two Big "Ansei" Earthquakes.

The disaster-pictures can be classified into the following four categories in terms of their purpose and making.

A. The feudal domain (HAN) as a patron ordered professional cartographers to record the disaster in order to capture the actual conditions of the disaster.

B. Village officers drew picture-maps in order to report the damage of the disaster in their village to the government, or they just wanted to make a record of their experiences for future generations.

C. People recorded the disaster just for their own use.

D. Booksellers and people in printing businesses made a documentary of a disaster or KAWARABAN (wood-block print) in order to sell at stores or on street corners for the masses.

Categories A, B, and C are considered to have existed from the beginning of the Early Modern period, on the other hand, category D became popularized only after the mid Early Modern period when the social condition for the buying and selling information was established.

The amount of records in categories C and D increased drastically and their contents became rich in the late Early Modern period. However, the total amount of records in a given period depends on the occurrence rate of disasters.

The four categories proposed above reflect the degrees of accessibility of information for people in the society. The issue of information accessibility in the Early Modern period is characterized by the fact that administrators hid or forbade information which were unfavorable to them. But the peculiar problems to the disaster information was often passed over, or allowed to be illegally published to prevent the false rumours and to secure the whole society.

Toyo Univ.,  
Hakusan, Bunkyo-ku, Tokyo, 112-8606 Japan  
東洋大学社会学部  
〒112-8606 東京都文京区白山

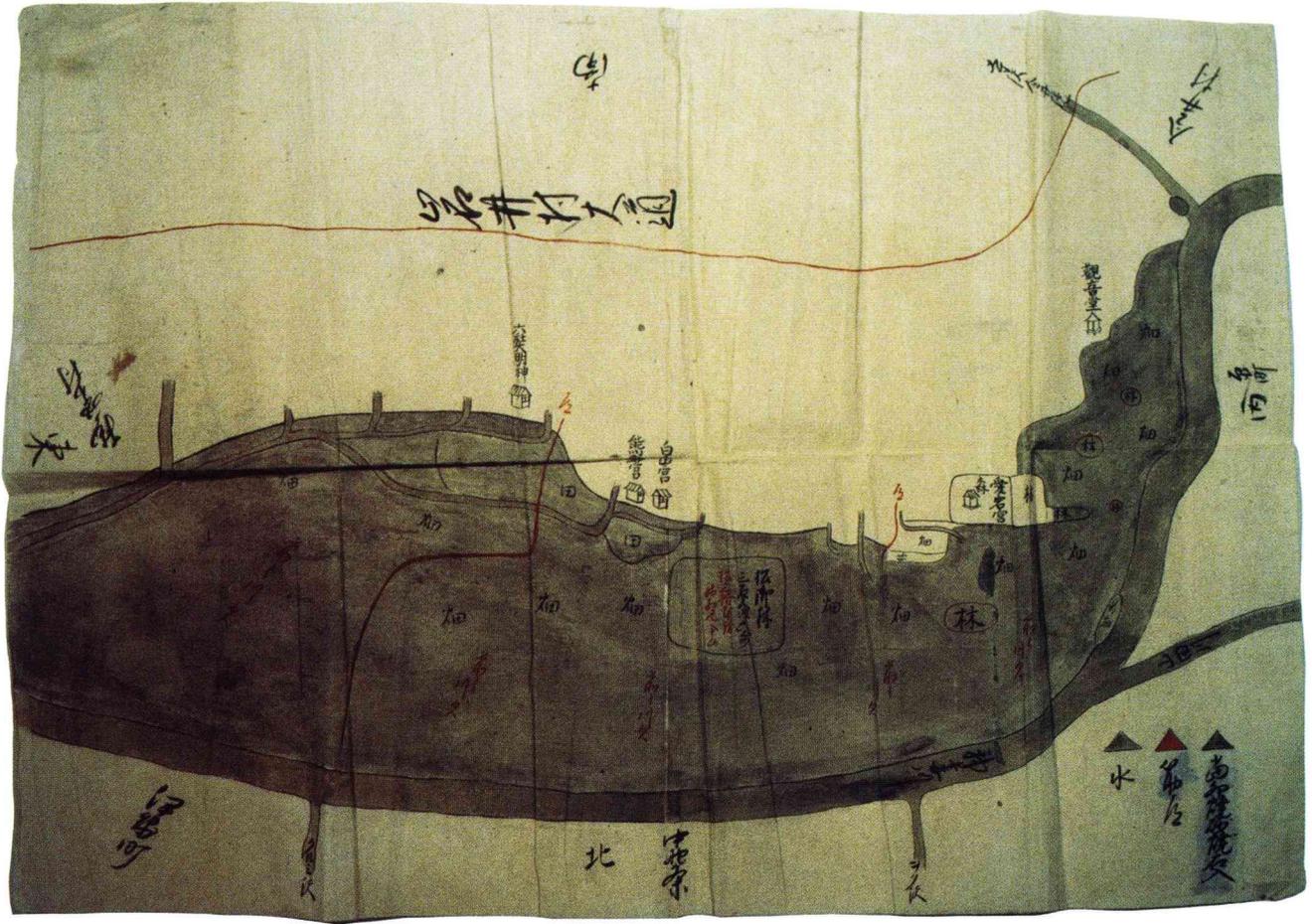


図3 浅間B-1「浅間焼け吾妻川沿岩井村畑泥押し図」(40×57)

Fig. 3 (Asama B-1) The lower part along Agatsuma River of Iwai village stricken with the deep Mudflow caused by the Eruption of Mt.Asama in 1783



図4 浅間B-2「矢倉村天明三年浅間山噴火荒地絵図」(45×57)

Fig. 4 (Asama B-2) Yakura village deprived of her 11 villagers by the mud-flow caused by the eruption of Mt.Asama in 1783

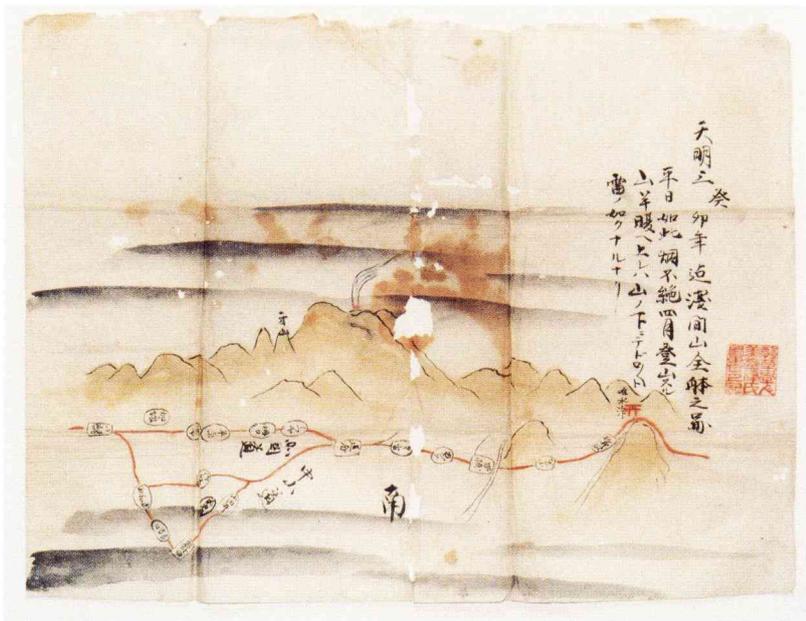


図5 浅間C-1(1)「浅間山全躰之図」  
(29×43)



図6 浅間C-1(2)「浅間山大焼之図」  
(29×43)

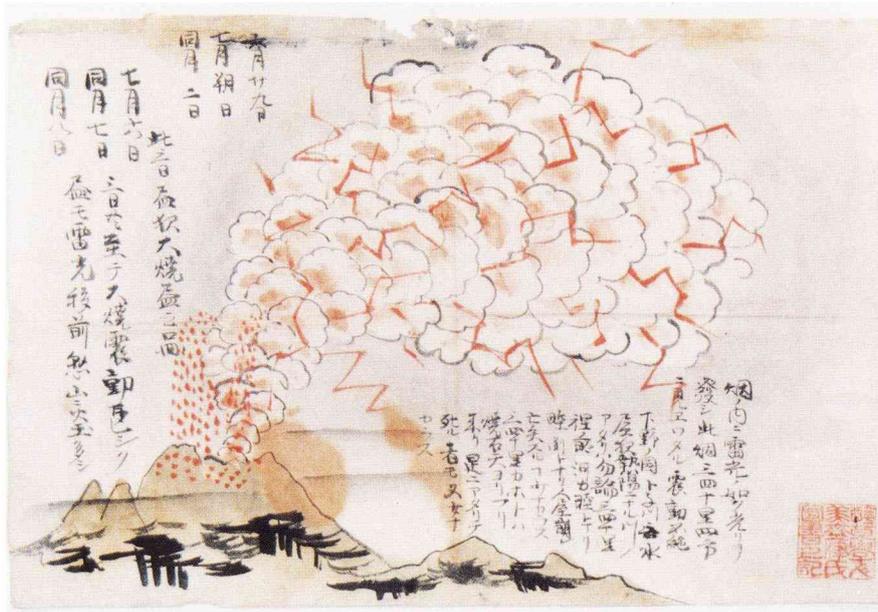


図7 浅間C-1(3)「浅間山大焼之図」  
(29×43)



図 8 浅間C-1(4)「浅間山夜分大焼ノ図」  
(29×43)

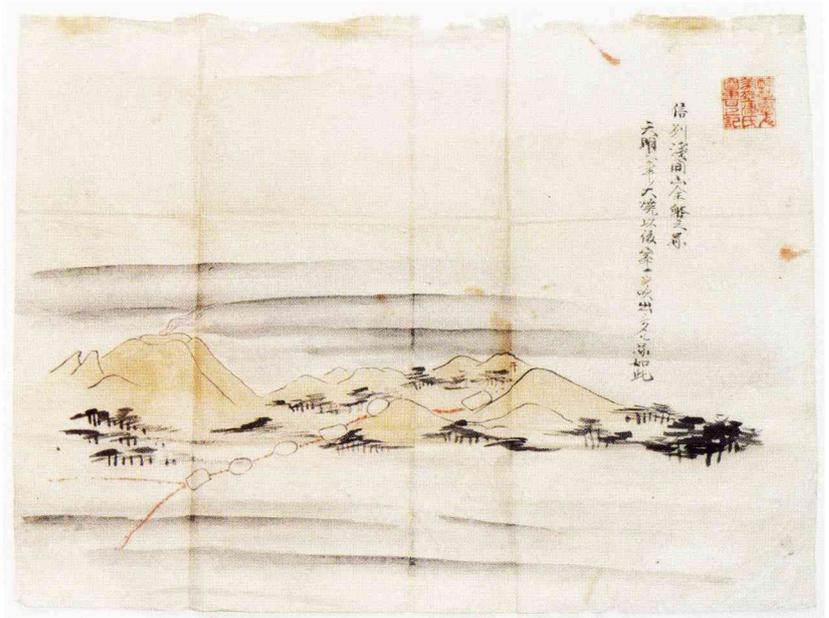


図 9 浅間C-1(5)「信州浅間山全軀之図」  
(29×43)

Fig. 5~9 (Asama C-1) The Pictures drawn about the process of the Eruption of Mt.Asama in 1783



図10 浅間C-2「信濃国佐久郡浅間嶽之図」(65×95)

Fig. 10 (Asama C-2) The Picture drawn about the climax of the Eruption of Mt.Asama in 1783. The Picture handed down from the forefather of Oosawa-ke in Mochizuki-Town in Nagano Prefecture



図11 浅間C-3「信州佐久郡浅間ヶ嶽大變略図」(38.5×110)

Fig. 11 (Asama C-3) The Picture of the real image of the Eruption of Mt.Asama in 1783

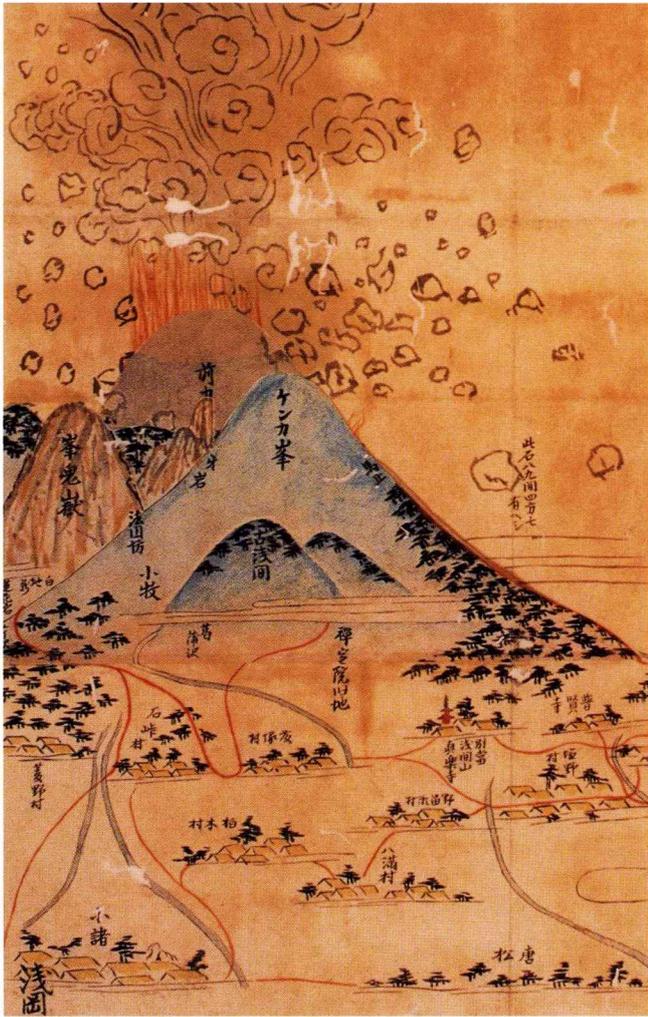


図12 浅間C-4「信濃国浅間嶽焼跡之図」(68.7×41)  
Fig. 12 (Asama C-4)

The Picture accompanied with the three pieces of the patches folded over the collapsed spots by the Eruption of Mt.Asama in 1783

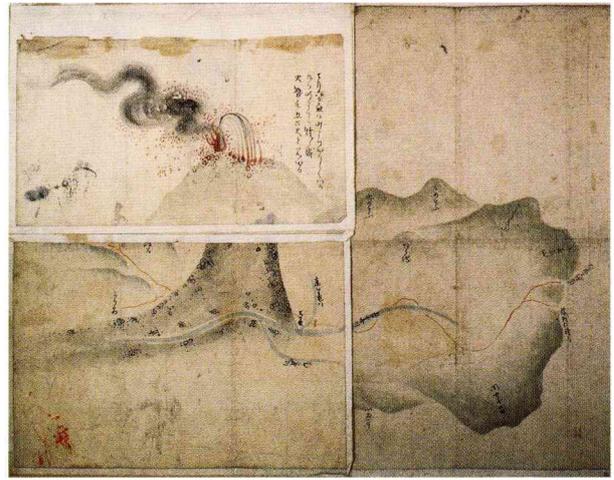


図13 浅間C-5(1)「天明三浅間噴火実況」(32.5×44)



図14 浅間C-5(2)「天明三浅間噴火実況」(32.5×44)  
Fig. 13, 14 (Asama C-5)

The only one Picture depicting at the northern foot of Mt.Asama, the rest of them depicted at the southern, or at the eastern foot of it

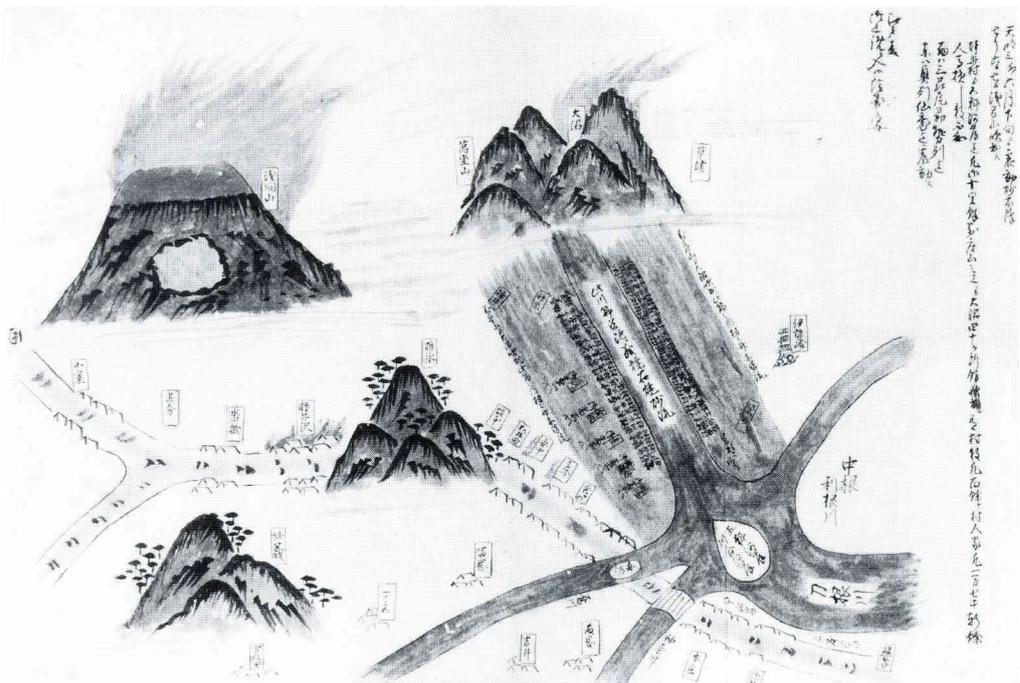


図15 浅間C-6「浅間山吹出之絵図」(29×43)  
Fig. 15 (Asama C-6)

The Copy of the offered picture to the feudal lord in Edo for reporting what happened at the Eruption

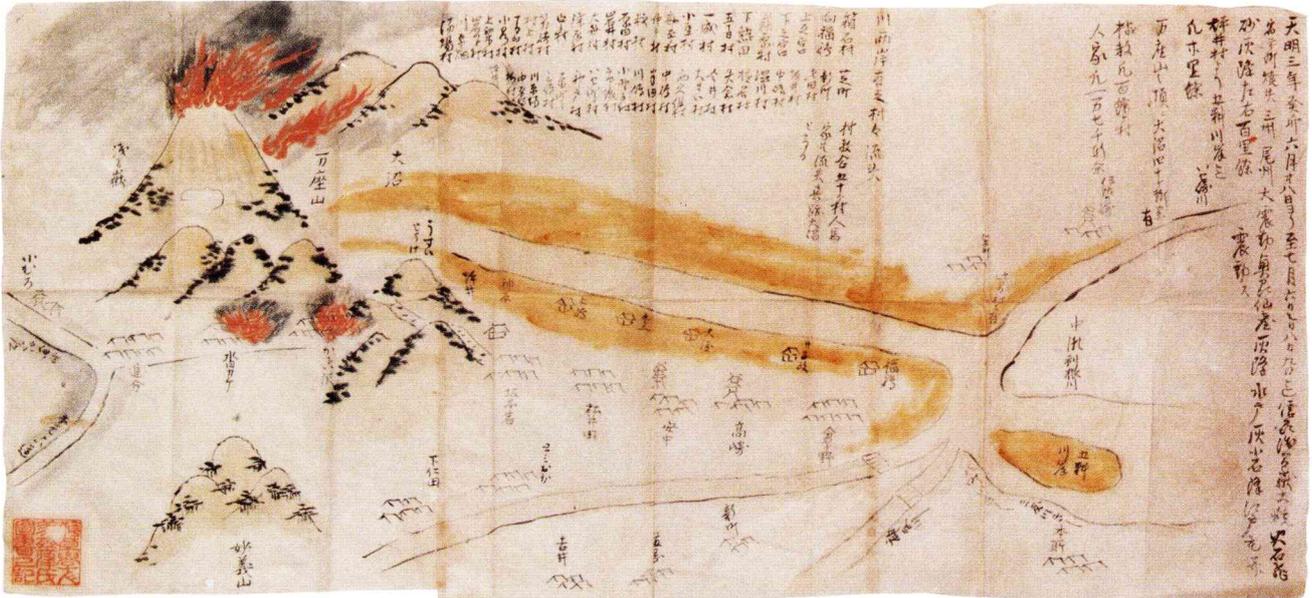


図16 浅間C-7「浅間山大焼之図」(33×73)  
 Fig. 16 (Asama C-7) The Copy of Fig.15 made at that time



図17 浅間C-8「浅間山焼出上州火石流満水絵図」(100×69)  
 Fig. 17 (Asama C-8) The Picture depicting the mudflow along Agatsuma River

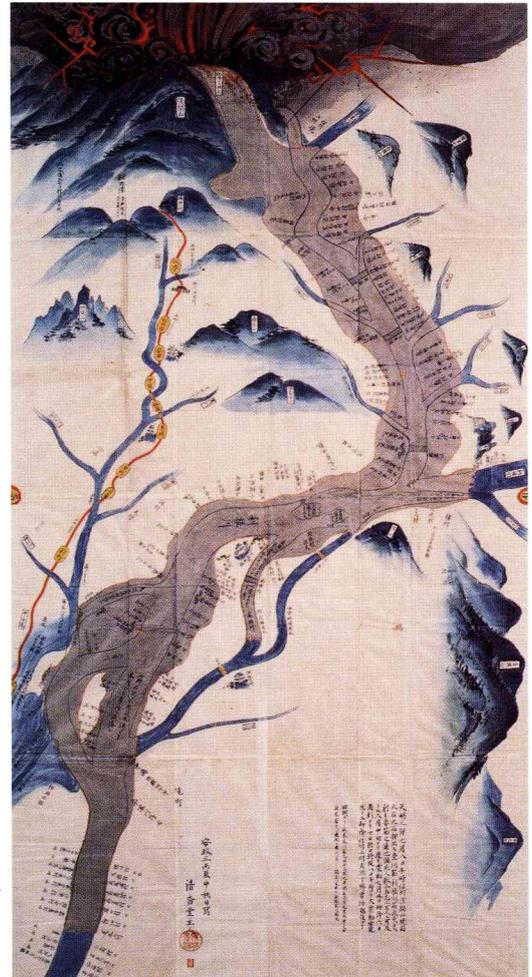


図18 浅間C-9「浅間焼吾妻川利根川泥押絵図」(156×84)  
 Fig. 18 (Asama C-9) The Copy made in 1856, more than seventy years after the Eruption



图19 浅間C-10「吾妻川筋被害絵図」

Fig. 19 (Asama C-10) The Picture depicting the mudflow reached at Goryo-kashi, far from the main stream of Tone River



图20 浅間C-11「天明三年浅間山烧出図」  
(29×155) (2枚組)

Fig.20 (Asama C-11)  
The Picture depicting how widely-spread the mudflow was. Many copies have been still found in the villages around there.



图21 浅間C-12(1)「浅間嶽焼出図之掛絵図」  
(35.3×47.7)



图22 浅間C-12(2)「浅間嶽焼出図之掛絵図」  
(35.3×47.7)

Fig. 21,22 (Asama C-12)  
The Picture consisting of two pieces folded, the one depicting the situation before the Eruption, another depicting the downfall of ash

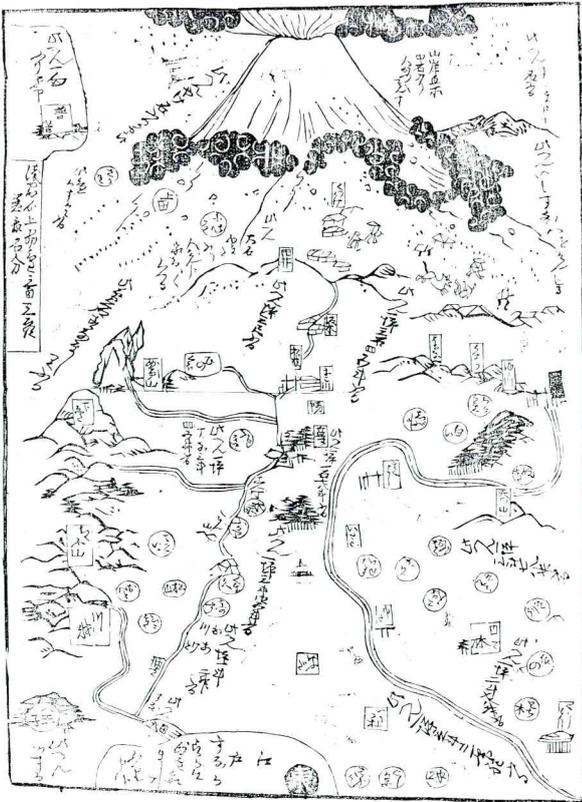


図23 浅間D-1「浅間山噴火かわら版」その1 (仮)  
(33×25)

Fig. 23,24 (Asama D-1,2)

The so-called Kawara-ban, wood-block prints decimating the Great Shock by the Eruption. These are belonging to the earlier type appeared in the midst of Edo period.

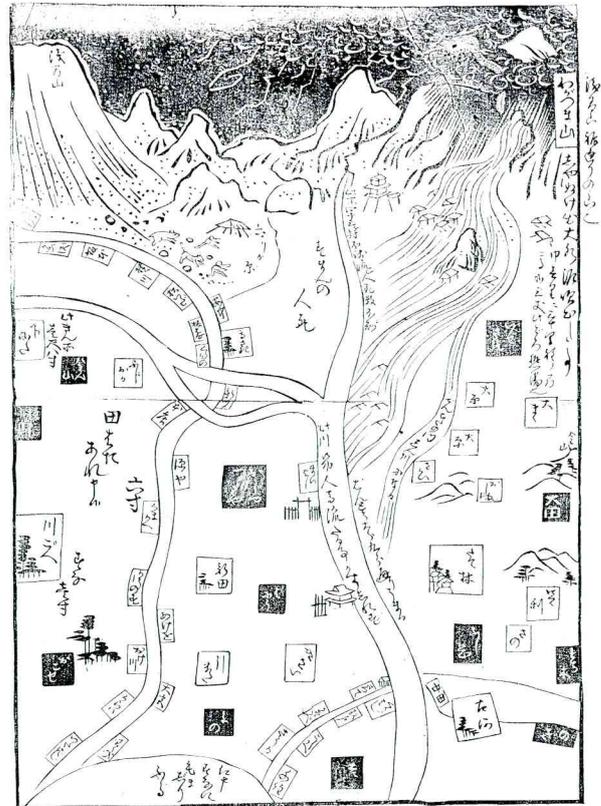


図24 浅間D-2「浅間山噴火かわら版」その2 (仮)  
(33×25)



図25 島原A-1「寛政四年大震図」(234×136)

Fig. 25,26,27 (Simabara A-1,2,3)

These three belonging to Category A, which the feudal government of Shimabara-han ordered its Professional Painters to depict precisely the collapse by the Eruption of Mt.Fugen in 1791. These three were the copies of the originals which would have been offered to Tokugawa-bakufu.

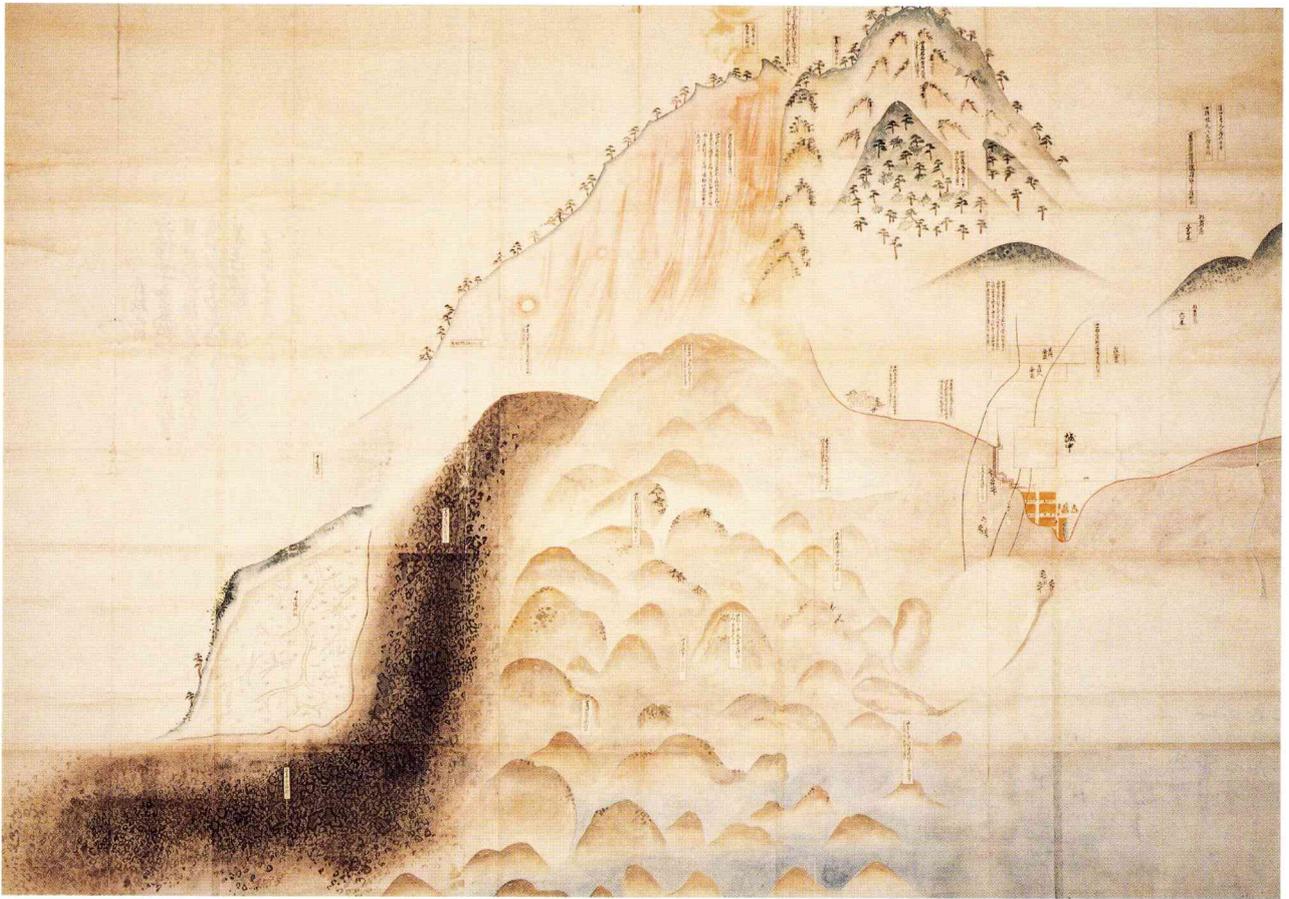


図26 島原A-2「島原大變  
大地図」(152.5×  
221.5)  
Fig. 26 (Simabara A-2)

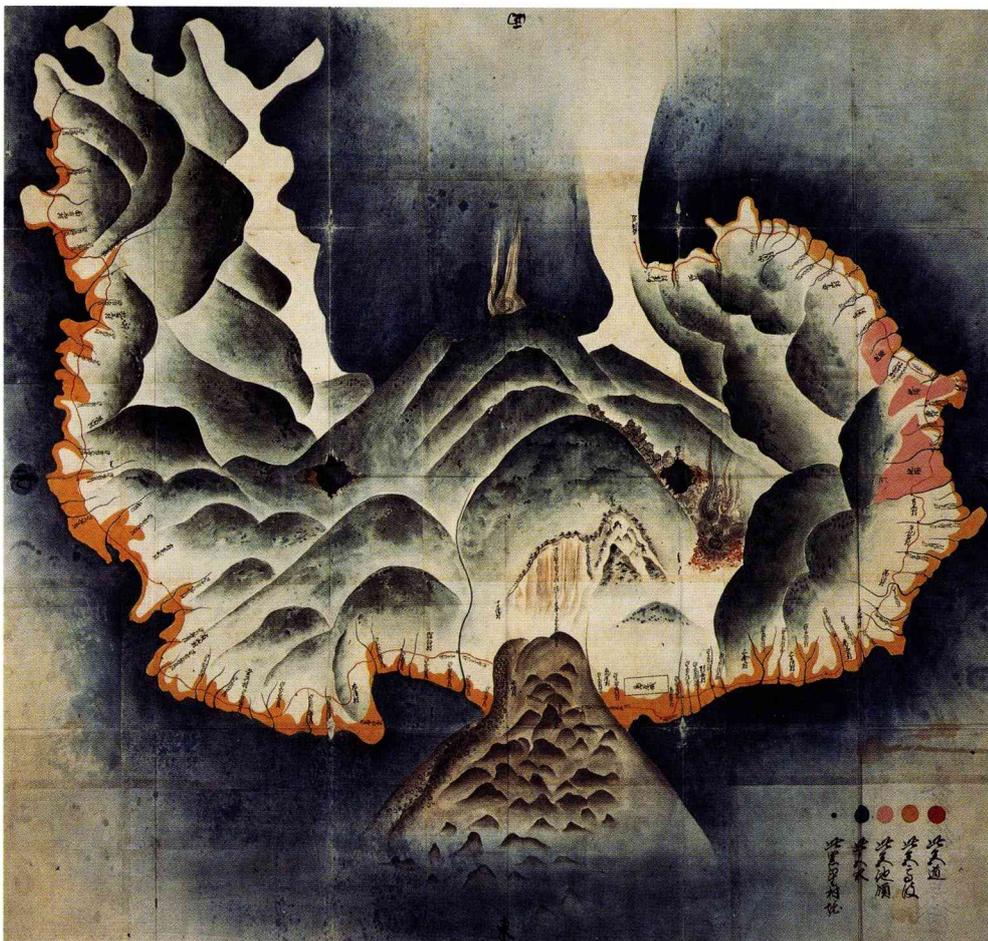


図27 島原A-3「大變後島  
原図」(156×161)  
Fig. 27 (Simabara A-3)



図28 島原C-1「寛政四子年肥前国嶋原山々燃崩城下町々村々破損ノ図」  
(38.7×56)

Fig. 28 (Simabara C-1)

The Picture painted at the Opposite Side of Ariake Bay, where was stricken with the Tsunami caused by the clastic flow of the Eruption of Mt.Fugen



図29 島原C-2「島原図」(「後見笑」挿図)  
(25×32.3)

Fig. 29 (Simabara C-2)

A sheet of the illustrations of the essay written by the Priest, including many descriptions about the disasters, the queer natural phenomena of those days



図30 島原D-1「島原大変」(仮) (23.5×33)

Fig. 30 (Simabara D-1)

The Kawara-ban, a wood-block print of the Eruption of Mt.Unzen, published at Osaka, or some big Cities in Kansai area at that time

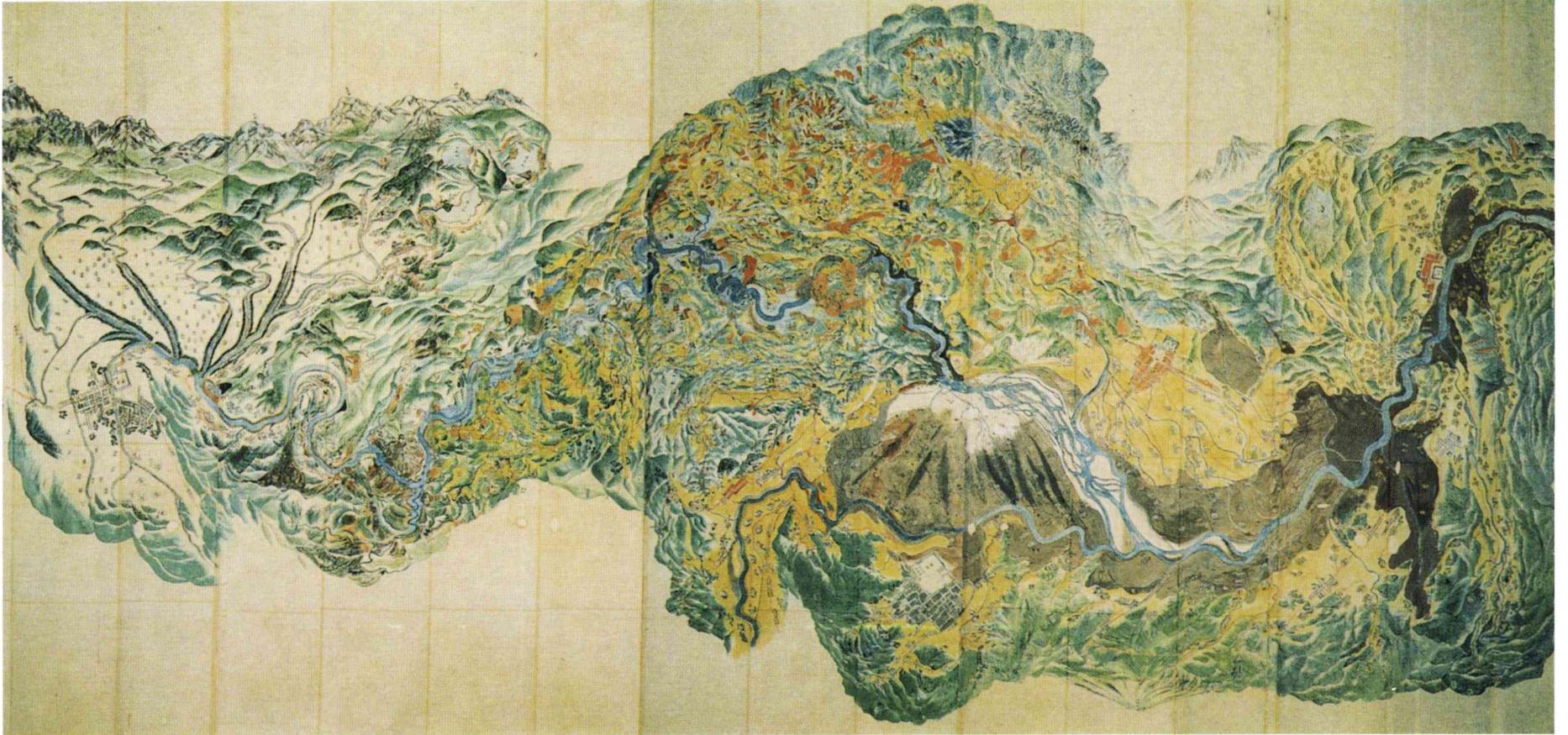


図33 善光寺A-1「信州地震大絵図」(190×420)

Fig. 33 (Zenkoji A-1) The big picture supposed to be ordered by the feudal lord of Matsushiro-han, to carry with him to Edo. He would have explained with this picture how deeply damaged his own domain was by Zenkoji Earthquake

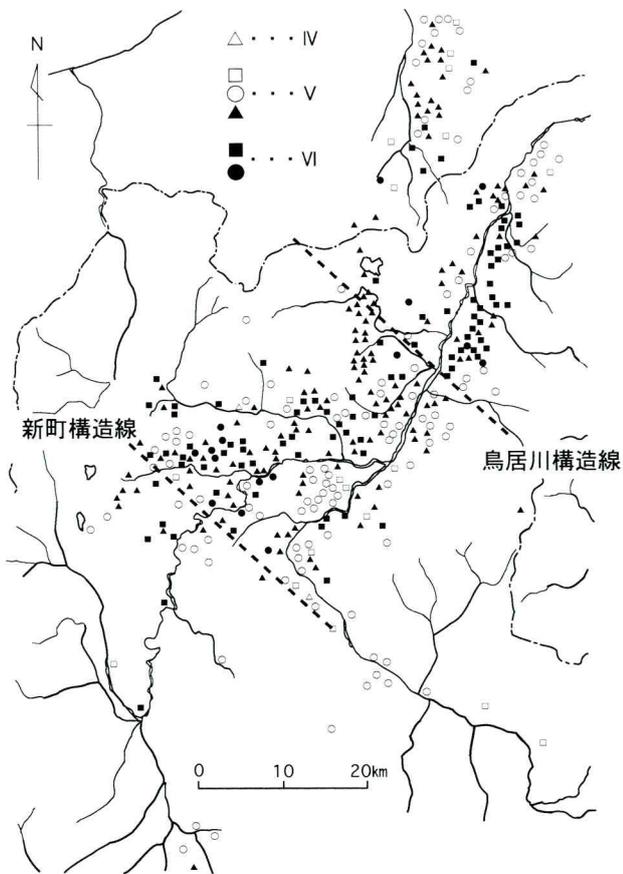


図31 善光寺地震（1847）における震度分布と断層  
 Fig. 31 The seismic intensity and the faults supposed to cause the Zenkoji Earthquake 1847

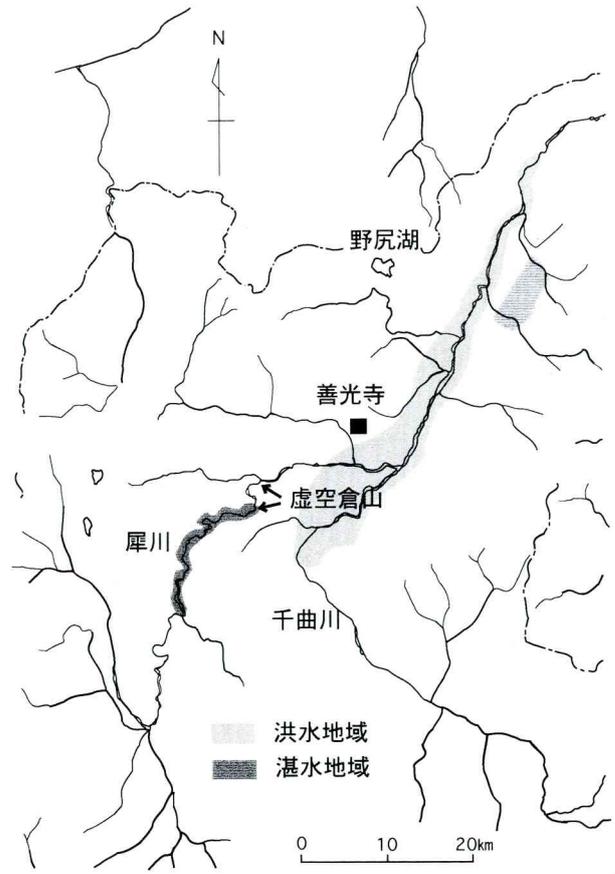


図32 善光寺地震（1847）による湛水域と洪水域  
 Fig. 32 The dammed up basin and the flooded Area by the Zenkoji Earthquake 1847



図34 善光寺A-2 青木雪卿「感応公丁未震災後封内御巡視之絵図」(36.5×60.5) (伊折村大田組震災山崩跡之図)  
 Fig. 34 (Zenkoji A-2) Aoki Sekkyou, the author of this picture, was one of the professional painters hired by the feudal lord. He accompanied the lord to the tour around the dominion, depicting not only the collapsed places by the earthquake, but also the beautiful sights.



图35 善光寺D-1「弘化丁未春三月廿四日信州大地震山顔川塞湛水之図」(90×88.5)

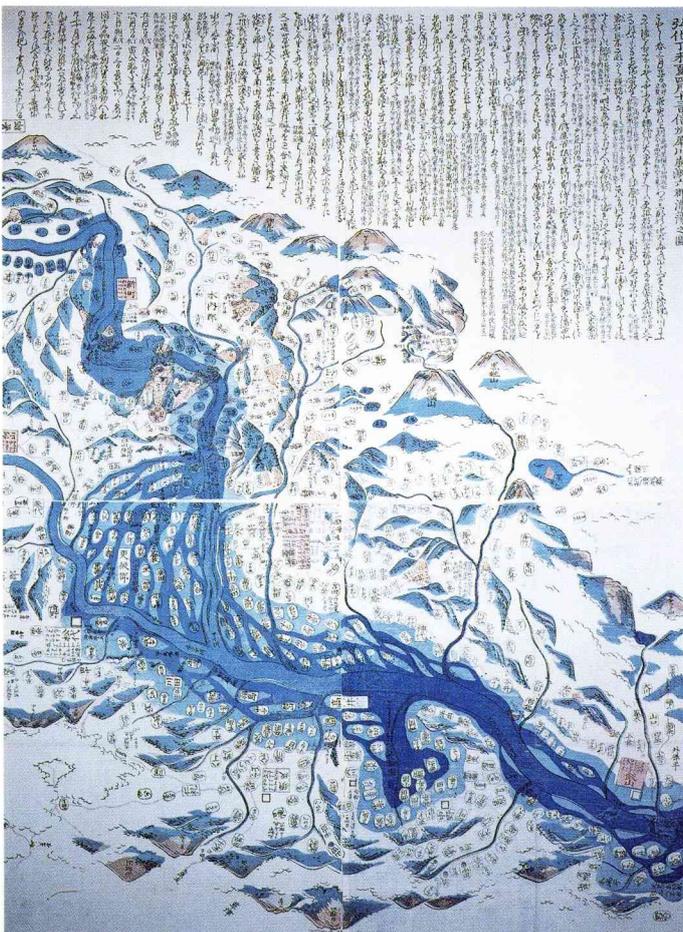


图36 善光寺D-2「弘化丁未夏四月十三日信州犀川崩激六郡漂蕩之図」(90×66.5)

Fig. 35,36 (Zenkoji D-1,2)

A set of the printed disaster-map made by Hara Masa-koto. The former explains the first stage of the disaster, the latter the second stage



図37 善光寺D-3「信州二度目大地震」  
(26×36)

Fig. 37,38 (Zenkoji D-3,4)

The typical Kawara-ban, the wood-block prints of Zenkoji Earthquake, supposed to be published around the Stricken Area

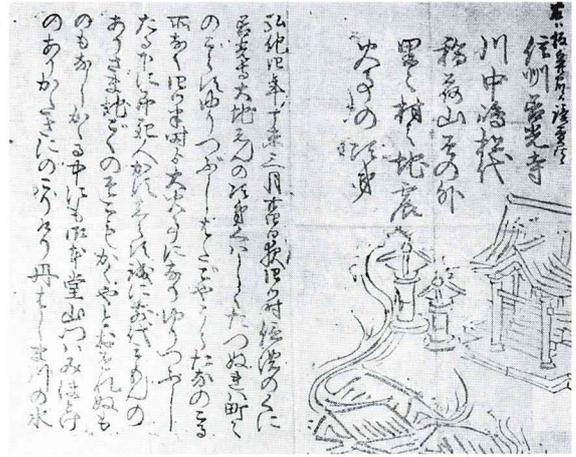


図38 善光寺D-4「信州善光寺川中嶋松代稲荷山その外町々村々地震出火の次第」(23×35)



図39 安政D-1「諸国大地震」  
(33.7×94.6)  
(上図, 下図2枚組)

Fig. 39 (Ansei D-1)

The Kawara-ban, the wood-block print, informing Ansei Earthquake which caused the Great Tsunami striking the long Pacific Coastal Area of Japan





図40 安政D-2「安政二卯年十月二日大地震并出火所方角細巨」(50×73.3)

Fig. 40 (Ansei D-2)  
The Kawara-ban, the wood-block print, informing Ansei Edo Earthquake which struck the center of the Edo-bakufu, brought about its destruction.



図41 安政D-3「ち志ん乃辨」(50.3×37)  
Fig. 41 (Ansei D-3)

The Kawara-ban, the wood-block print, informing the stricken areas by the great two continued disasters in Ansei Period, disguised the old almanac.